

に信用を掛けてゐた、何故なら彼にはまだ遺産があると云ふ事が知られてゐたし、また彼が融資を止める前に借財を全部拂つてゐたからであつた。

シャルルは當然友達の利益の分前を受ける積りでゐた。彼はそれを當てにして、レオニイの意見も聴かずに、彼女には新しい衣裳を、娘には綺麗な玩具を買つてやつた。レオニイは元々モンジエランが事業に成功し得る人間だとは信じたなかつたのであつた。事實、モンジエランはシャルルから金を借りて店を開きはしたが、彼自ら酒を飲み始め、やがては金を擲はないカラエ友達に掛け賣りをしたり、また彼の商品が悪くないと云ふ事を確めるために凡ゆる知人をその店へ引張つて来るやうになつた。そして其處で、此の新しい商人と彼の友達とは朝から晩まで、ぐてんぐてんに酔拂うまで飲み廻けた。

手塚の期日が到来した。モンジエランが支拂ふ事ができないので、債權者達はシャルルの所へやつて来た。

「モンジエランのためにそんなに貴方は責任を負はれたのですか？」とレオニイは、彼女の夫がその友達の約束手塚に對して二千フランの金を支拂つてゐるのを見ながらさう訊ねた。

「いけないかね？——嘗て彼は證文も取らずに、俺に金を貸してくれなかつたらうか？」

「え、それは憶えてゐますわ——たゞ貴方が署名なすつたのは之一つだけでせうね？」

「まだ五つ六つあるさ——併しモンジエランは他のは拂ふだらうよ——ああ！ そんなに俺をうるさからせないでくれ！」

「わたしは、シャルル、人間は友達に對するよりも子供に對して餘計義務があると思ひますわ、貴方は裏書をなさる際にそれをお考へになるべきだつたのです。」

「彼は大丈夫辨濟するよ。」

しかしながら、變りの手塚もモンジエランが支拂へないため全部シャルルの所へ持ち込まれて来た。かうして八ヶ那の間にシャルルは、店のために用立てた金は別として、彼のために一万フランからの金額を支拂つた。

「わたしは此の部屋を引越す事を知りて置きましたよ」と、或る朝レオニイは夫に向つて言つた。

「何故？」

「わたし達にはもう一千エクワしか残つてゐません。それに、貴方がお勤めもせず——金使ひを謹むことさへなさらないからと云つて、わたし達は此の上同じ道を進まなければならぬでせうか？——わたし達はもう七百フランも擲つて部屋を借りて居る事は出来ません——わたしは百エクワで他の部屋を借りる事にしたのです——それだつて大金ですわ——わたしはせめて其處には何時までも居たいと思つて居ますわ！」

「ああ、レオニイ——何を言ふのだ、——モンジエランは必ず——」

「あの人は一文だつて貴方に返しはしないでせう。貴方のお母様は貴方を助ける事はできません、近頃では御自分の生活さへ難かしくつていらつしやるのですから。わたしは召使ひも暇を出さうと思つてゐます——そして姉御か——織物の仕事を見付けて——わたしも働きますわ！」

「お前が、俺達一家のために働く？——あゝ！俺はそんな事は忍べない。」
 「でも子供が不自由するとなれば、わたしはそれ以上の事でも忍びますわー」
 丁度此のママレエの中にある恰好なアパートメントをレオニイは借りる事にした。それは小さくはあつたが、氣持の好い、相應の裝飾も施された部屋であつた。それにも保らずシャルルは、立退きを迫られた前の部屋へ入つて行つた時と同じ様に、鼻をうごめから仰ら言つた。
 「俺達はこの所に長くはゐないぞー」

一六 案山子

又もやレオニイの期待は破れた、良人をあんな醜い目に逢はせたからは、眞逆にモンジエランも今度の家へは訪ねては来るまいとレオニイは疑りで決めてゐた。處が或る日の事モンジエランはあの手形交換所の一件の訃と同じやうに陽氣な顔をして、二人の小さな家へ訪ねて来た。彼の姿を見ると、レオニイは眼を伏せて不快の色を氣取られまいとして居た。シャルルは悦んで彼の手を握つた。

「とうとう遣つて来たよ——久し振りで逢ふね、處で仕事の方が旨くゆかなかつたさうぢやあ無いかい？そいつは不可んね——君の今度の家が見附からんで閉口したよ——いゝ家ぢやないか——仲々良い住居だ。」

レオニイは悲しさに微笑み乍ら口を噤んで答へなかつた、シャルルは口ももり乍ら云つた。

「何うも高い處でねえ——」

「まだこれより高い部屋があるよ——それに低い處より健康のためにいゝ、子供の爲めにも良い——見晴しだつて、やあ！仲々良いぢやあないか——ベエル、ラシエエズの墓地が直ぐ眼の下だ。——時にシャルル君、斷賣が附かつたかね？」

「いやまださ——何うしたものか途方に暮れてゐる仕末だよ——」

「慎重にやる必要があるね——安心し給へ——借りた奴はみんなお返しするから——俺は決して君に迷惑を掛ける心算ぢやあ無かつたのよ」

「俺は知つてるよ、君が——」

「有難い——俺はロザアに借金を申し込んだんだ、處が素氣なく拒絶しやがつた、畜生め！俺は云ふだけの事を云ひ、するだけの事を仕てやつたよ、女と一緒に飲んだ日に、奴は女を引連れて逃げつちやつたらう、あの一件に至つちやあ決して赦さんよ——」

「女の方つて何方ですの？——何方と眞事をなすつたんですの？」とレオニイはシャルルを凝つと見詰め乍ら叫んだ、彼はモンジエランの足を踏み附けた。

「いや——俺は一緒ぢやあ無かつたよ——」

「おい、おい！ 君は何時まで僕の足を踏み付けてる心算だね？——あゝ、實に君には呆れるよ！——君は奥様が此處に居られるんで、女と一緒に飯を食つた一件を喋らせたくないんだね。止め給へ！——奥さんは男が遊ぶ事位ちやんと呑み込んで居られるんだ！——何んな賢人でも誘惑には克てんもの、僕等が悲しむ可き事だつて云ふ事は先刻御承知なんだ！——いまに年を取ると隠しくなりますよ、リヌウマチに罹り、腰が屈み、——兎に角細君の處へ歸りますね——さうすりやあ萬事めでたしくせうさ。」

レオニイは辭を外向けた。妻の機嫌の悪いのを見て取つたシャルルは立ち上つてモンジエランに云つた。

「散歩して見やうぢやないかね！」

「實は僕も誘ひに来たのさ！ それに今日は君に用がある——頼みたい事があるんだ。」

「御用で御坐いますの？」とレオニイは氣遣はし氣に彼を眺め乍ら訊ねた。

「ああ！ 心配な事はありませんよ、一寸付き合つていただきたいのです——シャルル君、来るかね、何うだい？」

「御伴しよう。」

レオニイは良人を隠し氣に見詰めた、彼は慌しく帽子を被つて出て行きさうにした。レオニイは良人に接吻し乍らその耳に叫んだ。

「妾貴方があの方と一緒に出て行らつしやるのを見ますとなんだかゾク／＼して参りますの——あの方は喧嘩が好き

でせう——これまで貴郎をいろ／＼と嫌な破目に陥した人ですのに、一緒に御出掛けになるんですの？——何うして家に居て下さいませんか？ ロオルが妾の教へた唄を歌つてお聞かせしましてよ。赤坊が貴方のお膝の上で踏上りますわ。」

「ロオルの歌ふのを聞いたり、フェリツクスを離せたりする時は外に幾らもあると思ふ、モンジエランの申出を拒む譯には行かんあ——あの男を怒らせて了ふからね——直歸つて来るよ。」

シャルルが出掛けやうとすると、レオニイが呼び留て云つた。

「あの子供達に接吻しないで御出掛になりますの？」

彼は子供達に接吻してやつた、その間モンジエランは待ち遠しさに口笛を吹いてゐた。漸く事でシャルルは友人と一緒に家を出た、モンジエランは階段で云つた。

「君は確に接吻するのも忘れやしないかね？」

「モンジエラン君！ 餘り暇いよ！」

「君は細君の前ぢやあ恐ろしく眞面目な辭をするね、僕あ閉口したよ。そんな事は何うでもいよ！——家庭なんざあ喰らへだ、一つ度抜擲ぎをやらうぢやあ無いか——」

「いゝね、僕はこの四五日と云ふものは恐ろしく退屈してゐたんだ。」

「毎日細君と差し向ひぢやあ飽きも仕ようさ。處でロザアの奴が僕に金を借さんので、流石の僕も堪つてるのさ——

兎に角君からはもう借り度くはないし、それに今僕は巴里切つての情熱的な、肉感的な女を手に入れたんだ——仲よく良いのが居るよ——僕は女共についてちやあいろく／＼の事を知つてゐるがまづ第一にね——何うも一杯やらんと話し悪くいよ——其處へ入らうぢやないか。」

「其處の——飲屋ぢやないか——」

「さうさ、白葡萄酒の良いのを飲ませるよ。君は氣取つてゐるから不可んよ、さあ、入り給へ——」

彼はシャルルを押した、シャルルは恥かしさうな様子をし乍ら飲屋へ入つた。モンツエランはその家の馴染と見え、先きに立つて階段を登り、二階の廣間に入つて行つた。卓の上には酒の汚點だらけなナブキンが並べてあつた、モンツエランはシャルルに話し掛け乍ら腰を下した。

「何うだ、一寸良い處だらう？」

「然し——恐ろしく酒臭いねえ。」

「酔香の匂ひでもすると思つてゐたのかい？——君は哲學者ぢやあ無いね——給仕、白い奴を呉れ——いつもの奴を頼む、但しもつと良ければ尚結構だ——」

給仕の運んで来た酒で咽喉を濕してからモンツエランは先刻の話の續きを話し出した。

「君に話した通り、女を口説き落とすことなんぞあ僕には難つ子を絞めるより造作もない。最初その女に話したのはフアナムブルだ——まあ短に話すとね、その女は象の様に大きな、肥つた奴と一緒に居たのさ。僕はその女に話つ

ちまつて、後を尾けたんだ——勿論巨大な騎士も一緒なんだ。そいつが女の部屋から出て行くのを見届けてから、窓に石塊を抛つて僕が下に居る事を知らせてやつたのさ——最初の石塊は狙ひが外れて隣室の窓ガラスを壊したが、そんな事は何んでもない。敵軍に話すがね、僕はその女をつつかり丸め込んで、直ぐ敵意になつた、そして女が僕の巨い野郎に世話になつてゐることや、巨い野郎は砂糖屋で、ウツと金を持つてると云ふ事を聞かされたのさ。女はすつかり僕に打ち込んぢまつて、砂糖屋の旦那と離れたいなんて云ひ出したんだよ、然し君も知つての通り、僕はロマンテイックな人間ぢやあ無い、僕は女に斯う云つてやつたんだ、まあ待て、砂糖屋の世話になつて居な、さうすりやあ不自由はあるまい、僕は今の處モンジャア・ピイルを飲ませてやる事も出来ん仕末だ、當分そいつの世話になつてゐて、俺と面白い目をすりやあいゝだらうつてね。」

「その話は僕には何んの關係もないではないかね？——ステファノ夫人の様な叔母さんでもあるのかい？」

「いや、彼女は親類が一人も無いんだ、——そんなのたあ性質が違はあね！——まあ僕に話をさせて呉れ給へ——處で僕はテミール——これは女の名さ——の處へ忍ぶには、僕の砂糖屋さんの來ない時分を見計らつて行かなくてはならん、而も僕は砂糖屋と再三階段で出會してゐるんだ——僕の方ぢやあ大いに敬意を表して、出来るだけ壁へ體を押し付けて奴を通してやるんだが、それでも未だ變な面をして僕を睨みやがる、砂糖屋の奴は僕を憶えてやがるんだよ。テミールに聞いたんだが、何うも怪しいと睨んでるらしい、奴が餘り嫉妬くのでテミールは僕と一緒に外出するにも、腕を組んで歩くにもビク／＼ものさ。これぢやあ困るからねえ。シャルル君、僕の頼みたい事が分らんのかい？」

「分らんね。」

「僕達と一緒に歩いて貰へばいいよ、テミイルと腕を組んでね——それから一緒に食事をして貰へば良いんだ——テミイルがいつも揃ふからね、なに君には迷惑は掛けんよ、さうすりやあ誰かテミイルに會つて、その事をあの砂隠屋に報告しても、僕等は些つとも似て居ないから、砂隠屋さんも眼を光らさん譯だ。君の事をテミイルが旨く吹き込んでくのだ——つまり君はテミイルが待ち焦れてる兄弟だと云ふ事になるんだね——旅行から歸つて来て、味と散歩をしてゐるんだ、至極簡単さ！」

「君は女に類類なんぞ無いと云つたぢやないか？」

「なに心配する事無いよ、君はテミイルの兄弟さ——君はテミイルと腕を組んで歩くんだけだ、——僕は君の友人になる、若し君と一緒に歩いてる處を見付かつたら、僕が偶然君と落ち合つた事にするのさ。承知して呉れるかね？——握手しよう！ 君はいつも善良だ、ではテミイルに會はうぢやないか、奴はグロオ・カイオのシグヌ・ロオヂでマトロオト（魚のスワブ）を食べ度がつて居たつて。」

二人がブルドン廣小路へ差し掛ると、背の高い肥つた、二十六七になるけばくしい衣裳を着込み、左の腕に疊んだ肩掛を掲げ、花やリボンや篋をこごとくと附けた帽子を被つた婦人が、膝の見える襪を高く取つて、セリセエ街の方から遣つて来た。

「あれが僕のテミイルさ——あいつも立番をしてやがる——まるでプロシヤの兵隊だ、僕を一秒と待たした事がな

いんだからね！」

「なんだつて——あの女が君の情人かい？」

「その通りさ——大女に僕が恐れを食つても思ふのかい？ ははあ、解つたよ！ 君はあいつの兄弟にしちやあ君が小さいと思ふんだね？——然し君、そんな事は有り勝ちな事さ——二人がその婦人の眞向ひになつた時、彼女は今しも器用な指つきで嗅煙草を撮み出し、一オンスは充分詰まると思はれる鼻の下へ指を挿つていつた處であつた。その大きな眼、大きな口、その大げさな醜の諸道具は、堂々たる體格にいかさま釣合つてゐた。

「やあ！ 来たね、では君の兄弟を連れて来たよ！」とモンジュエランが云つた。

テミイルは丁寧にシャルルに會釈し乍ら、氣取つた譯で答へた。

「あら、では御承知下さいまして？——お解りですか？——お聞き下さいましたの？」

「さうよ——友達に打ち明けるなんぞあ、骨の折れる仕事だぜ、一つ僕の情婦の兄弟になつて、僕の敵の眼を胡麻がして呉れ給へ。」

「まあ、なんて道楽者なんでせう！ まあ、些つと譯かになさいよう！——道楽者の貴方や！」とテミイルに手提げから嗅煙草をいこたま包んだ白いハンカチーフを引張り出し乍ら、狡るさうに答へた。

「さあ行かう、シャルル君、早速だが味と腕を組んで呉れ給へ、そして出来るだけ眞面目な風をしてシグヌ・ロオヂへ行かうぢやあないか。」

彼等はグロオ・カイオへ行つた。テミイルは餘り體を免れさせたのでシャルルの腕は痛くなつた。が料理の香ばしい匂ひは彼をすつかり元氣にした。モンジエランは廣間で食事を仕ようと云ひ出したが、それは小部屋よりも氣が利いてると云ふのであつた。テミイルは小羊の様に情人の云ひ次第になつて居た。久し振りで美味い酒にありついたシャルルは、まるで野蠻人のやうに飲んだり食べたりし乍ら時々甘つたるい醜をしてモンジエランに話し掛けるテミイルと歩調を合せた。

「なんて氣の利いた歌立てせう——貴女は消樂者よ、本當に苦勞人よ——」

「下らん事を云ふなよ、しかし僕は儘に苦勞人ぢやあるよ——シャルル君、君の妹御の健康を祝す——さうだ、一つ歌を聞かせて貰はう——けちなカナリヤ見たいな聲ぢやあない、雷の様な聲だよ——實に素晴らしいもんだ——是非歌つて貰はうぢやあないか。君に話し聲と歌ふ聲と何んなに違ふか聞いて貰ひたいもんだ。」

「でも廣間ぢやあ——人が大勢ですもの。」

「なに構はんよ。嫌な奴は嫌だと云やあいいんだ——僕等が比處に控へてゐるんだ。」

お茶が出る時モンジエランはテミイルに歌ふ様に誘ふた。彼女は羞しさに周圍の卓子を見廻し乍ら呟いた。

「いくらなんでも羞しいわ。」

「なんだ、氣の小さい事を云ふな。僕が歌つて呉れと頼むんぢやあないか。」とモンジエランが云つた。「僕は是非ありつただけの聲を出して貰ひたいな。あの連中は運がいゝ、お前の歌が聞けるんだ、きつと遣つて来てアソコオルを頼

ちよ。

テミイルは斷り切れなくなつて、歌ひ出した。「アアー、ケル・ブレイジイル・ド・オトル・ソルダアー」モンジエランはすつかり感心して傾聴してゐた、そして外の連中も感心して居やしないかと部屋中を見廻した。

テミイルが歌ひ出すと、廣間の連中は驚いて一齊に此方を眺めた。最初のうちは少しばかり歌ふのならまあ／＼歌つてゐてやらうと思つたらしかつたが、兎手は遠慮なく歌ひ續けた、而も彼女の聲は皿の音を消して了ふ位大きかつた。部屋の向ふの端に陣取つた二人の青年が堪まらなくなつたものと見えて、大きな聲で笑ひ出した。モンジエランは彼等の方へ向き直つて高い聲で歌つた。

「靜かにしろ——貴様達は人が歌つてるのが聞えんのか？」

「聞かん譯にや到底ゆくまいさ——」とモンジエランの背後に坐つてゐる老紳士が吐いた、モンジエランはそつちへ向き直つた。

「何んと仰つたんですな？」

「俺はな——あの紳士達は奥さんのお歌ひになるのを傾聴せにやならんと申しましたのですかな。」

「あゝ——さうですか、あいつ等の耳を擽つていゝ氣持にしてやらんけりやあならんと云ふんですな？」

「さやうですよ——實に氣持のいゝお聲です。」

が老紳士はテミイルが金切聲をあげて繰返し繰返し歌つてゐる間に食事もそこ／＼に給仕を呼び、歌定を擽つて出

て行つた。外の連中も四五人この老練士に倣つた。モンジエランは彼の勝を過る連中を一人一人睨み付けた。やがて彼はテミールの爲めに力一杯に拍手した、シャルルもそれに倣つた。

「何うだ、感心したかね？」とテミールが歌ひ終るとモンジエラシは云つた。

「實にいゝ聲だね、僕は何處に居るのか忘れて居たよ！」

「君の云ふ通りだ——この女は實に良い聲だよ——もう一つ歌つて呉れないか、氣が乗つてゐるうちに是非歌つて欲しいな。」

「あら、知らないわ——」

「一二僕の好きな奴を頼む、『ジュ・タタンダラ・カゼルヌ』に『タエル・ブレイジイル・ド・トルソルダア』だ！」

「まあ、本當に仕儀のない人ね、好きな奴に歌はせるわね。では貴方もつとシャムベンを云ひ付けて頂戴な。」

「お前の好きなにするよ——おい、給仕、シャムベンを持つて来い、それからあの隅の連中に少し静かにしろと云つて呉れ。」

「ええと旦那様、お話をなすつて居らつしやるのをお止め申す譯には参り兼ねますで。」

「なに、出来ん事があるか、この女の方が歌ふ間は黙つて居なくちやあならん、さもなかつたら俺が黙らせなけりやあならん。」

給仕は言葉返しては劍呑と見て取つて、無言で引退つた。やがてテミールは歌ひ出した。テミールが小唄の三節

目へ漕ぎ付けるまでに、廣間の連中は二人の青年を除いてみんな逃げ出してしまつた。この二人の青年は珈琲を聚り俵ら互に顔を見合せて、テミールが聲を張り上げる度に腹を抱へ乍らハンケチで顔を隠した。これに眼敏く氣の付いたモンジエランはむくれ上つた。彼は立ち上つて二人の方へつか／＼と進んで行つた、年上の方の青年もまだ二十を越しては居なかつた。

「夫人が歌つとられるのに何が可笑しくて無禮な嗤笑ひをなさるんですか？」とモンジエランは二人を睨み付け乍ら云つた、一人の方はすつかり怯氣付いたものと見えて、口を噤むだまゝ眼を伏せた。もう一人の元氣の良ささうな顔付をした青年は、大膽に詰問者の顔を見詰め乍ら答へた。

「失禮ですが、私共は笑つても決して支障ないと存じます、殊に今の様に非常に満足してゐる時には。」

「ははあ、御満足になつとられるんですかな？」

「さやうです、私の友人は今晩は一様千金だと申して居りますし、それに私達は今晩マリブラン夫人の歌を聴きに來く筈でしたが、貴方のお連れのお歌ひになるのを拜聴するために、中止した様な次第でございます。」

「あゝーでは面白くつて笑つたんですか？ さうですか、では握手しやう——いや面白い青年様君ですな、何うです此方へ來てシャムベンを一杯やり給へ。」

この二人の青年は代官人の書記で、いつもこんな機會を狙つてゐる手合だつたので、二つ返事でモンジエランの云ふなりになつた。モンジエランは二人をテミールに紹介した。

「ねえお前、このお二人は音楽愛好家なんだ。プウフェへ行かれるんだつたが、お前の歌を聴くために故意々々残られたんださうだよ。もつとシャムペンを命じよう、そしてお前に「カリフェ」の味覚調を大切にやつて貰はうぢやあないか」「ドウ・トウ・レ・ベエ。プウル・ヴウ・ブレイル」て云ふ處を。テミイルは二人の若者に愛想よく會話した、シャルルはテミイルの歌が片付くと聞いてホーツとした。

三人は斯うして時々顔を合せた、シャルルは勿論拒まなかつた。彼はテミイルと一緒に、モンジエランの指定した場所へ出掛けて行く途中、幾度となくシャルルを窺つと眺める肥つた紳士に出會した。

「あれが妾の旦那ですの、」とテミイルが囁やいた、「平氣な顔をして下さいな、妾の兄弟だと思ひますからね。」シャルルは口を噤んで答へなかつた、が兎に角この肥つた紳士の態度が不氣味であつたので、もう二度とテミイルの兄にはなるまいと決心した、が次の日になると彼は誘はれるままに二人の案山子になつた。彼が毎日氣樂に遊び廻つてゐる間、妻のレオニイは子供たちの世話をしたり働いたりしてゐた。レオニイがシャルルに向つて何うしてモンジエランといつとも一緒に出て行くのかと訊ねると、彼は斯う答へた。「僕等は散歩に行くのさ——お前の働いてるのを見るのは辛いからね。」

或日の事であつた、シャルルが肥つたテミイルと一緒にモンジエランと會ふ筈になつてゐるシャンゼリゼエの方へ歩いてゆくと、プウルヴァアルの方から、テミイルが旦那の砂糖屋さんと呼んで居る肥つた紳士か遣つて來た。彼は二人の方へつか／＼と遣つて來て、シャルルに會話もしないでいきなりテミイルに云つた。

「何處へ行くんだ？」

「あの兄さんと散歩して居ますのよ——此處に居りますの。」

「ああ、さうかい——いつも聞いて居る——よし、よし。」

帽子を取つてゐる兄さんの方は見向きもせずには行つて終つた。

「貴方の旦那は餘り禮儀の正しい方ぢやありませんな。」とシャルルが云つた。

「え、少し變なんです——氣になさらないで下さいな。」

彼等はモンジエランと落ち合つた、シャルルは今し方起つた出來事を話したがモンジエランはそれを一笑に附し彼は素晴らしい御馳走の事ばかり考へて居た。三人は大きな料理店へ入つて小さな廣間で食事をすませた、其處には外に四五人のお客が居るばかりであつた、食後のお茶を飲んで居る最中に、突然二人の客が入つて來た、一人はテミイルの旦那砂糖屋さんで、もう一人の方は砂糖屋と同じ處にで／＼と肥つた男であつた。

旦那の妾を認めたテミイルは狼狽へてシエリイを鼻の中へ挿し込んだ、シャルルは蒼白になつた、モンジエランは平氣な顔をして手にして居た杯を傾け乍ら云つた。

「まあ何うするか見て居てやれ——」

彼等はつか／＼と三人の坐つてゐる卓の方へ遣つて來た、砂糖屋さんはテミイルとモンジエランの顔を代る／＼と眺み付け乍ら叫んだ。

「これだからお前は兄弟と一緒に散歩をするんだな！」

「それが何うしたんですか？」とモンジエランが云つた。

「あたし達散歩しますとね」とテミイルは口籠もり乍ら云つた。「兄さんがお友達に合いましたのよ、それで御一緒に食事をしますの。」

「それに違ひありません。」とシャルルが云つた。

「なる程違ひない！」と云ひ乍ら砂糖屋はシャルルの方へ詰め寄せた。「貴様は嘘をついてるに違ひない！ 貴様がテミイルの兄貴だと？——お伽噺は止めしろ！」

「何ですつて——」

「貴様はこの悪戯の桐葉になつて俺を胡麻かさうと仕やがるんだな——これでも喰らへ！」云ひ終るか終らぬかに彼はシャルルの横びんをしたたか撲り付けた。彼が気が付く前にモンジエランは食卓の上に跳び上つて砂糖屋の首をひつ掴んだ、シャルルはもう一人の男に夢中で躍り掛り、皿を顔に叩き付けた。——これはほんの一瞬間の出来事で同じ部屋で食事をしてゐた連中が席を立つ暇もない位であつた。テミイルは悲鳴を揚げた、給仕が駆け付け、お客は立ち上がった、やがて喧嘩してゐる連中は引き分けられた。

「此處を出やうぢやないか、紳士諸君！」

モンジエランが叫んだ。「こんな侮辱はこれだけぢやあすまされん。しかし皿を此の上投すのは下らん事つた。われ

くが必要とするのは殆だ。」

「その通りだ。」と砂糖屋が答へた。「一つ話を付けやうぢやあ無いか！」

四人は一緒に出て行つた。テミイルは一人で食卓に墜つてゐた。彼女は泣いたり喚いたり、頭を壁に叩き付けて見たり、あらゆる方法で自分を苦しめて居た。五分ばかり経つとモンジエランとシャルルが戻つて来た。モンジエランは喧嘩の前と同様に陽気な顔をして居たが、シャルルは沈んでゐた。

「まあ、戻つていらしたのね！」とテミイルは叫び乍ら走つて行つてモンジエランの腕の中へ體を投げた、折よくモンジエランは壁の近くを歩いてゐたので踏み止まることが出来た。

「あゝ、もう片が付いたよ、片が付いたんだ！」

「片が？——何んですつて？——もう？」

「時難な！ 僕等は今晚は決闘しないんだ、もう暗いからな。だから明日だ——六時にやるんだ——場所も決めたし、誰も後へ退く者は居らん——」

「何んですつて、明日決闘なさるんですつて——」

「さうさ、もつといゝ酒を一壇空けやうぢやないか、然し何も酒で勇氣を付けやうと云ふんぢやあない、あいつ等の爲めに興を殺されたから飲み直さうと云ふんだ！」

モンジエランは一人ではしやいでゐた、シャルルは笑はうと思つても笑へなかつた、彼はともすると沈んでしまつ

た、今まで小屋の事を考へてゐたテミールは砂糖屋との間が不味くなつたのを悔んでゐるらしかつた。

「貴方はうちの砂糖屋さんを殺しつちまふ心算なの？」とテミールは氣遣はし氣に訊ねた。

「さうさね、お前が許して呉れりやあねー」

「しかし——貴方があの人を殺せば——もう妻の世話をして呉れないわ——」

「そいつは氣の毒だがね——仕方がない。」

「でも妻はね——」

「この一件にはその「然し」てえ奴がないのさ——」

「モンジエランさんや、貴方は妻を苦しめるのよ、だから——」

「なんだ、下らん！ 黙つたり！ 黙つたり！——陽氣な顔をして呉れ——さもなくばお前はあの砂糖屋に惚れてるんだぜ！」

彼女は漸く黙つて佛頂面をした。モンジエランが激定を拂つてゐると、テミールはその小高を覗き込んで呟いた。

「一時にこんなに飲んだり、食べたりするなんて莫迦の骨頂だわよ！」

シャルルは早く一人にならうと思つた、彼が行かうとすると騎兵が後から呷つた。

「明日會はう！」

「明日だ！」とシャルルは家の方に向つて重い足を引摺り乍ら考へた、「明日は決闘しなくてはならん——あの女の

兄弟だなんて云つたからこんな事になつたんだ——」シャルルは後から後からと濃くなつて来る暗い考へを忘れようと努め乍ら、眞夜中近くまで當てもなく辻路付き廻つた末、自分の家へ戻つて来て、持つてゐた鍵で中へ入つた。疲れたレオニイは二人の子供を抱いてぐつたりと眠つてゐた。彼は暫くの間小供達の罪のない寝顔を眺めてゐた。とその瞬間に彼は、彼が如何に子供達を愛してゐるかを意識した。失ふ懼れが生じて始めてそれをより愛する様になるのが普通である、これが最後の接吻ではないかと思ふ時に愛するものから離れ離れ感するものが人情である。可愛らしいロオルの顔にはもう母親の優しさがそつくり浮んでゐた、フェリツタスのまるくした顔はまるで眠り乍ら微笑んで居る顔に見えた。

「あゝ——なんて可愛らしいんだらう——」とシャルルは嘸り呟いた。「しかも明日は決闘しなくちやあならん！ 若しもの事があれば子供達は父親を失つてしまふのだ！ 彼等を護つてやらなくてはならん人間を奪ひ去つて終ふかも知れん——」彼等を護り——彼等を育て——やる！ 俺はやくざ者だ——ああ——實に悪黨だ——」彼は自分が憎らしい——この俺は莫迦な事しか仕出かさん奴だ！」

彼は鼻を上げて身振りを始めた、レオニイが床の上で寝返りを打つたので、彼は身振りを止めた、彼女を起すまいと思つたからであつた。彼は急いで床へ入つた、少しでも眠つたなら氣が落ち付くだらうと考へたが、何うしても眠られなかつた、彼は一晩中時計の鳴るのを聞いてゐた。彼が眠られなかつたのは勇氣がなかつたからではなかつた、勝つた所で少しも名譽にならぬ事件の渦中に捲き込まれたのが悔ひられたのであつた。

夜が白んだ。五時になるとシャルルは起きた。彼はそつと妻に接吻した、彼は妻を強して出て行くのが辛かったが妻が眼を醒さないうちに出て行きたかつた。

シャルルは靜かに着物を着て出て行かうとした——彼は後髪を引かれる様に感じてつい後を振り返つた、彼は小供達を眺めた、そしてこれが恐らく最後であらうと思ひ乍ら無心にすやくと眠つてゐる小供達に接吻した。ロオルは接吻されるとパツチリと眼を開けた。

「あら、お父さまよ——あのあたいをお父さまのお床へ連れてつて下さるの、さうでしよ？」

「靜かに——靜かに——とロオルに聴かない様にと合圖をし乍ら言つた。『其處においでよ——さ、もつと眠ねなさい——もう一度ねんねなさいよ、ロオルちゃんや——まだ早いからね——』

「あら、でもお父様何うしてもう着物をお着になつたの？」

「それはね お父さまは御用があるの——誰いぢや不可ないよ、お母さんが眼を醒ますからね——」

「はい、あたし又眠るの——あのね、朝御飯に巻餅をお土産に持つて来て頂戴よ あたしと坊やにね——巻餅の美味しいのよ——え、お父さま？」

「よし、よし——さよなら、可愛いロオルや——さあおやすみよ——」

シャルルは娘に再び接吻を與へてから、急いで出て行つた。もう時間が切迫してゐた、彼は勇氣の挫けてゆくのを感した。やがて彼は街頭へ出た、彼はモンジエランが煙管を濡らし乍ら家の扉をブラ／＼してゐるのを見附けた、彼

の姿を見ると急にシャルルは元氣付いて、小走りに走つて行つてモンジエランの腕を掴んだ。

「あゝ——何うしたんだ——早いぢやあ無いか——未だ時間にやあ無らん——なに、僕は部屋の中で煙草を呑むよりは外の方がいゝから出て来たんだがね。」

「さあ行かう、場所は何處だね？」

「サン・シヨオモン堤さ——おい、君、さう急ぐな、まだ時間は充分だ——ピストルはポケットにちやんと用意してあるし、業物だよ——さう、さう——あれからテミールと愁嘆場を減じてね——あの畜生、今更紗襦袢の心臓をしてやがる——」

モンジエランは喋り通しに喋つてゐた、がシャルルは簡單に應答へするばかりであつた、彼はともすると急いだ、モンジエランは時々叫んだ。

「莫迦な——さう急ぐなよ——奴等が先きに行つてたら、待たしとくさ。」

彼等は定められた決闘の場所へやつて来た、シャルルを撲つた男は昨日の連れの男と一緒に其處へ来てゐた。

「僕等は若干遅れたでせうな、」とモンジエランが口を切つた。「然し僕等は時計を持つて居ないし、間に合ふ心算だつたんですよ——さあシャルル君來給へ、君が最初だ——君の運が惡かつたら僕が仇を打つてやるよ、僕はテミールの情人であり、従つて僕にも多少の關係があるからなあ。」

肥つた紳士は黙つて答へなかつた、彼はピストルを介添の男に渡した、武器が交換され距離が計られた。

「さあ、シャルル君、」モンジュエフンは彼にピストルを渡し帰らせた。「最初に君が射撃するんだ——僕が云つた事を記憶し給へ——」

シャルルはピストルを擧げて、早く片を附けたいと思ひ乍ら、狙ひを附けるが早いかな金を引いた、弾丸は敵手に中らなかつた。敵手の砂糖屋は充分に狙ひを付けて射撃した、銃聲と共にシャルルは自分の血を浴び乍らその場に倒れて終つた。

一七 生死の境

レオニイは眼を醒まして、良人が居ないのに気が付いて吃驚した。シャルルはいつも遅くなつてから歸つて来たが、朝早く起きる習慣は無かつた、最初は良人が昨日から家へ歸らないのではないかと心配したが、小さなロオルが母親に云つた、

「あら、あたし今朝お父さまを見てよ、あたしに挨拶なすつたんでお眼が醒めたのよ。」

「お父さんが今朝お前に挨拶なすつたの？」

「さうなのよ——それからね、お母さまが眠してゐらつしやるから睡いちや不可ないつて仰つたのよ。」

「そんなに早く何處へ行らつしやるか、あんたに仰有らなかつたの？」

「いゝえ——でもあたしと坊やに朝の御飯に巻物箱を御土産に下さると仰つたから、そんなに長くないわ。」

レオニイは良人がモンジュエフンと會ふ約束でも仕たのか、さもなくば仕事口が見附かつたので出掛けて行つたのだらうと考へた、彼女は子供に着物を着換へさせた、シャルルが萬が一にも歸つて来はしないかと云ふので朝食を始め、るのを暫く待つて見た、が俄らに時が経つばかりであつた。朝食はいつもより一層陰氣であつた、シャルルが朝食を家で食べないのはこれが始めてであつた。レオニイは取り留めのない不安に襲はれた。いつもの通り彼女は針仕事を取り上げて窓の傍へ坐つた、が窓の傍に坐つてもレオニイは殆んど外を眺めた事がないと云つてよかつた、彼女はシャルルが家を空けたことをいつもの様に諦めて了へなかつた、シャルルがいつになく朝早く出て行つたのが何んとなく氣懸りで堪らなかつた。レオニイは娘のロオルにいろ／＼の事を訊ねて見た、お父さんはお元氣だつたの、それとも黙つていらしたのと訪ねて見ても、ロオルは斯う繰返すばかりであつた。

「あのねえ、お父さまはあたしを澤山挨拶して下さつてよ、お母さんのお眼の醒めるのを心配してらしつてよ。」

「シャルルが妾の眼を醒ますのを心配したんですつて？」——とレオニイは獨言乍ら新しい恐怖に襲はれた。「あゝ——何うしたらよいでせうか——心配な——又あの人——昨日はモンジュエフンと一緒に——あゝ——ソロ／＼して来た——あの人はいもうこれ切切歸らないのぢや無いかしら——」

何時か正午は過ぎて二時になつた、がシャルルは歸らなかつた。レオニイはもう仕事も手に附かなければ、一つ所に寝つとしても居られなかつた、若しこの家に門番が居たならば、彼女はとうに彼に向つて、良人が何か傳言を聽んで行

きは仕なかつたかと訊ねたがも知れぬ、がこの建物には門番が居なかつた、それに彼女は近所の人達と口を利かなかつた。彼女がこの建物で知つてゐるのは十八九になる若者一人で、家根裏の小屋に住んで居た、彼の部屋の窓はレオニーがいつも仕事をすると窓と眞向ひになつてゐた。

彼の名はジャスティンと云つて二十二になつてゐた、腰が靜かで誰が小供染みてゐる上に合蓋み屋であつたので彼はせいく十八九にしか見えなかつた。彼は誰に對しても丁寧であつた、彼は一介の労働者であつた、彼は街燈を點したり、暴動に加はる様な事はしなかつた、仕事に熟練して、母親や妹達を助けるために出来るだけ收入を多くしよう云ふのが彼の望みであつた。彼の友達は彼を嘲つて、雲の上に居て下界の事を知らぬ奴だと云つて居た。

このジャスティンは時々屋根裏の小屋に閉ぢ籠もつて窓の近くで本を讀み乍ら、眞向ひの窓ぎわで、子供を愛撫する時の外は仕事の手を休めた事のない、若い婦人を眺めた。悲しみの爲に驚れ、頬もこけては居たが、彼女はまた笑しかつた、そして彼女の憂ひを含んだ美しさが彼を引き附けたのであつた。彼は幾らでも見たい丈け彼女を眺める事が出来た、彼女は仕事をして居る時には子供達に眼を移す外は決して眼を擧げなかつた、越つて彼女は屋根裏部屋の窓から、本を讀むのも、母親が彼を待つてゐるのも忘れて幾時間も幾時間も彼女を見詰めてゐる労働者に氣が付かなかつた。ジャスティンは窓ぎわに坐つてレオニーの一舉一動を見守り乍ら溜息を洩らしてゐた。彼はレオニーに戀してゐると自分に向つて云ひ切る程大膽ではなかつた、が何が起りつゝあるかが解らない程單純でもなかつた。彼が意外に思つたのは、レオニーの良人が殆ど終日外へ出てゐることゝ家にゐて彼女に對して冷やかな態度を取つ

てゐる事であつた。ジャスティンはレオニーの隣へ越して来てからは、一層外出しなくなつた、彼は仕事を終へるとすぐに自分の部屋へ歸つて来た。彼はレオニーに話し掛けやうとは仕なかつたが、然し彼女の爲に盡してやる機會を待つて居た、そして彼女から言葉を掛けられ、彼女に見られ、眺くとも彼女に存在を認められ、ばそれで充分であつた。レオニーが戸を開けて、何か買物に出掛けると彼も戸を開けて彼女の歸つて来るのを待つてゐる。彼女の足音が階下の方に聞えると、彼は彼女と行き逢ふために故意々々下へ降りてゆく、そしてこんな事を繰り返して考へる。——俺はあの女を間近に見るのだ——あの女の衣裳に觸る事が出来る——あゝ、何て幸福だらう！彼は希望と幸福に胸を躍らせ乍ら階段を降りてゆく。が愈レオニーが彼の傍へ遣つて来ると、この儼な青年はすつかり狼狽へてしまつて眼を伏せ乍ら壁へべつたり體を寄せて終ふ、そしてレオニーが彼を見たか何うか氣が附かないうちに彼女は通り過ぎて終ふ。

或る日の事であつた、レオニーは二人の子供を連れて散歩に出た、その歸りに彼女はまたさうは歩けぬフェリックスを片方の腕に抱へ、娘のロオルの手を曳ひて階段を登つて行つた。彼女は一階毎に立ち止まつて息を入れなくてはならなかつた、玉の様な汗が彼女の額を傳つた、丁度其處へ仕事から歸つて来たジャスティンが通り掛つた。彼はその日はいつもより勇氣があつた、彼は母親の手からフェリックスを受取り乍ら云つた、「大變失禮でござんすが、お疲れの様でございませぬ、若しおよろしかつたら坊つちやまをお連れ致しますせう。」彼はフェリックスを戸口まで連れて行つて、禮を云はれるのを待たずに去つてしまつた。その日からレオニーは彼に逢ふ度に親し氣に點頭してやる様にな

つた。

彼女がシャルルの歸宅を待ち焦れ、心を痛め、良人の還音か聴こえやしないかと耳を澄まして居る時に、階段の隅に足音が聞えた、そしてそれは次第に近附いて来た——

「ああ、お父さまよ——」とレオニイは叫び乍ら扉を開けた——それはシャルルではなくてジャステインであつた。彼女は落膽して、そして深い溜息を洩らし乍ら呟いた。「あの人ぢやなかつた。子供達も走つて来たが悲しさに繰返した。『あら、お父さまぢやないわ——』」

ジャステインはレオニイの失望と懊惱に氣が附いた、レオニイの爲めに何か仕てやり度いと云ふ望みは彼を幾らか大膽にしたので、彼は口を切つた。

「如何なすつたのですか、奥様？ 何か御心配の事でいらつしやいますが。御主人に何かお變りが御ありでしたのでせうか？」

「いえ、さやちやございませぬの、まあそんな事が無ければと存じとりますの、主人が今日は早くから外出しましたんで御座います、妾に何も申しませんが、貴方ひよつとして階段で今朝迄に御會で御座いませぬでしたか？」

「いいえ、御目に掛りませんでした。」

「ほんに妾の取越し苦勞かも知れませぬですけど、妾は夜遅くに歸る事が御座いますの。」

「さやちの様にいらつしやいますな、大抵お一人の様で。」

彼は斯う云つてから、何か失禮な事を云つた様な氣がして眞赤になつた、が彼女はそれに氣付かなかつた。彼は急ぎ込み乍ら云つた。

「あの、何處に居らつしやるか御解りで御座いましたら——私が一寸走つて行つて参ませう——そして御様子伺つて参りませう——お役に立ちます事なら悦んで致しますが。」

「ほんに有難う御座います、ですけど妾何にも存じないのですの、何處へ参るのか存じませぬの——娘が申しますには、すぐ歸ると申して出て行つたのださうで御座います——多分友達の方と一緒に居ると存じますわ——本當に有難う御座います——さ、ロオルさんにフェリ坊や、中へ入りなさい。」

レオニイはジャステインに會釋して扉を開けた、若い勞働者は入口にその儘残つて彼女と話しをする事の出来た幸福に酔つてゐた、が一方で彼女の悲し氣な顔を見た事や、彼女の心の不和を回復してやる事の出来ない事を悲しくも思つた。が細君さへ良人が何處へ行つて居るか知らぬのに、何うしてその様子が解らう？ 然し鬼に角も彼は階段を降りて街へ出た、そして家から餘り離れないで彼方此方と歩き廻り、若しや隣の主人の姿が見えはしないかと遠くの方を眺めてゐた。

一時間ばかり斯んな事をして居ると、何んだが解らぬものを取り置んだ一隊の人達が此方へ進んで来た、人々はレオニイの住んで居る建物の前に止まつた。ジャステインは群衆を押し分けて覗いた——鐵架の上に怪我をした男が正氣を失つたまま横たはつて居るのが見えた。彼はその男が彼の變してゐた人間なのに氣が附いた。

「あゝ——死んだんぢやあるまいな——氣の毒に細君が待つて居るんだ！」と絶望した儘にジャステインが叫んだ
 「真逆云ふな！ 死にやせん！」と機架を衝つた男の腕に立つてゐるモンジエランが答へた。然しまあそれに近い
 状態だな——兎に角、醫者は癒るだらうと云ふんだ——いづれにせよ、俺はこの男の敵は取つてやつたんだ！ 此男
 の敵手も右の腕板に一發喰つたんだからな。さあ、やれ、四階まで一息に運んちまへ——さあ除いたり！」

「まあ、一寸待つて下さい——この人の細君に氣の毒な細君に——この事を知らせてからにして下さい——さもない
 と吃驚して死ぬかも知れませんから！」

「君の好きにし給へ、それに君はこの男を纏の包み見たいに簡單に四階まで引つ張り上げると思つちや不可ん、充分
 注意して手間を取つて上げるんだからな。」

ジャステインは階段を一時に四五段宛駆け上つて、レオニイの家の扉を叩いた、レオニイは良人が歸つて來たもの
 と思ひ乍ら戸を開けた。がジャステインの蒼白な歪んだ顔は彼女を戦慄させた、レオニイは彼の眼で災難か起つた事
 を知つた。

「何うしましたの？——ああ、神様！ 何を、らせに來て下さいましたの？」と彼女は僕へ何ら云つた、ジャステイ
 スは何と答へてよいものか知らなかつた、彼は話すのを恐れた、そして口籠つた、

「奥さん——御主人が——」

「君が何う致しましたの——お會ひになりましたの？」

「吃驚なすつては不可ませんよ——あの御主人は悲劇なすつたんです——」

「えつ！ 決闘ですつて？ まあ、此が知らせたんですわ！ 何處に居りますの？ さ、貴方、妾をお連れ下さいまし！」

「今此處へお連れします——負傷なすつたんですが——直ぐ癒るさうです——あゝお連れしたやうです——」
 憐ましい行状は近付いた。血の氣の失せた良人の顔を見るや否や、レオニイは低い呻きを洩らし、眼を閉ぢ、正氣
 を失つてジャステインの腕の中へ仆れた。ジャステインはレオニイを部屋の中へ連れて行つた、父親と母親が仆れて
 氣を失つてゐるのを見たロオルは胸を貫き通すやうな聲をあげて泣いて居た。

この騒ぎの中でいつもの通り落ち着き擡つてゐるモツジエランは、シャルルを床の上に横たへてやつた、一方ジャ
 ステインはレオニイを正氣付けやうとして骨を折つてゐた。

「なに女の方は心配する事無いさ——とモンジエランが云つた、女は泣く、それから涙を乾かす——それだけで、
 が心配なのは男の方だ！ おい、貴様は行つて醫者を呼んで來い——それから若い、君は看護婦を寄越して呉れ
 給へ——近所の人でもいゝ——門番の女房でも良い——なんだつて、此家へ女つ氣が無い譯ぢやあるまい？
 ——ぢやあ君が建つて呉れ給へ、僕が看護婦を呼んで來る——が此處へは歸らんよ！ シャアルの細君が僕を怨むだ
 らうからなあ——然し僕は全然責任が無い——負傷したのは朝の六時だが、直連れて來られなかつたんだ、まづ酒屋
 へ連れて行つて醫者手當を施したのさ、それから運搬する人足を捜したんだが仲々見附からんだ——おや、細君
 が眼を開いたぜ——ぢやあ俺は去くよ——あの砂糖屋の畜生め——が此方からも充分と釣銭を出してやつたん

だー」

モンジエランはそそくさと出て行つて終つた、レオニイは漸く正氣附いた、彼女は氣を取り直して良人の方へ馳せ寄り、その顔に接吻と涙を注ぎ乍ら泣いた。

「あゝー 妻の言ふ事が聽えませんかー 死んだんぢやないでせうか？」

「いや、大丈夫です、氣絶になつただけですよー 運んだために氣絶されたんですー 私はこちらから外科醫を呼んで参りませう。」

「ああー さうでしたつけー 一番良いー 一番上手な方をー 御一緒にお連れ下さいましー」

「直ぐ行つて参りますー 私が行きますがー 御一人ぢやあ御困りですねー あの連中はみんな歸つたんだー ああ、金が欲しくて手傳つたんだー よし、よしー」

彼は急いでレオニイの家から飛び出した、そして階下へ降りて行つて片づ端から戸を叩いて叫んだ、「お願ひですー 御主人が怪我をした四階の女の方に力を藉してあげて下さいー」世間の人達がみんな同情心に富んで居る譯のもではない、ある人達は戸をめた切りで出て來なかつた、がある人達は直ぐにレオニイの處へ駆け付けて、ジャステインが醫者を呼びに行つてる間、彼女に手を藉したり、慰めたりしてやつた。間もなくジャステインは外科醫を連れて來た、シアルルは正氣附いた、妻も子供も舞つたが、一言も口を利く事は出來なかつた。醫者は傷を診察して、可成の重傷なので今の處何とも云ひ兼ねると云つた、いろいろの注意を與へてから彼は歸らうとしたーレオニイは膝をつき乍ら叫んだ。

つき乍ら叫んだ。

「先生ー 今晩もう一度來て頂けませんでせうか？ー 毎日も、毎時間にも貴方の御時間の許す限り來て頂けませんまいか？ー 良人をお助け下さいまし、先生後生で御座いますー」

外科醫はレオニイを助け起して、兎に角全力を盡して見ようと約束した 手傳ひに來た女房連も醫者と並んで歸つて行つた、残つたのはジャステイン一人で、彼は父親の病氣を心配して泣いて居るロオルを慰めてやつて居た。小さなフェリックスはまだ何の事か解らなかつた彼は大勢の人達の出入りを賑しがつて居た。ジャステインはレオニイに近附いて恥かしさうに云つた。

「あの私は看護婦を呼んで來ようと思ひますがー 貴女はいつも御主人の看護をなさる譯には参りますまいー」

「いゝえ、出來ますわー 出來ますともー いつも看護してやりますわー」

「しかし奥様、それではお體が堪まりませんよー 子供さん達の事をお考へにならなくては、若しもの事があれば何うなさいます？ 子供さん達の事をお考へになつて、少しはお體を大切になさらなくては不可ません。ー 兎に角私に代つて看護させて下さいませんかー 貴女が晝の間御世話をなさる、さうしましたら夜分は私が代つて看護して上げませうー 私に若くて丈夫です、私なら平氣です、貴女には到底そんな事はお出來にはなりませんー 體が保ちませんものー 貴女はお仕事で疲れていらつしやいますー 御願ひですから私にやらせて下さいましー」

彼は眞心を辭に現しながら頼んだ、レオニイは涙に濡れた眼でジャステインを見詰ながら彼の方に手を伸ばした。

「あゝ！ 貴君は御親切な方です——妾なんとお禮申上げてよいか解りませぬの！ 餘り突然の不幸でお禮を充分に申し述べた事も出来ませんが、今迄にして頂いた御親切は身に染みて嬉しく存じて居りますの。」

「お禮——いえ！ 私には貴君のお役に立てばそれで本當に幸福で御座います——私の氣持ちがお解りでしたら——」
 ジャステインは何と云つてよいか解らなくなつて終つて恥かしさうに眼を伏せて、黙り込んでしまつた、そして差し出された手を執る事が出来ないで、それを自分の胸にいつかりと押し附けた。その時戸を劇しく叩く者があつた、ジャステインが戸を開けると、五十ばかりになる、丸いボンネットを被つた大きな干乾びた、黄色い顔をした婦人が入つて来て斯う云つた。

「病人のある、看護婦のお入用のお宅は此方ですか？ 背の高い、立派な、色の黒い紳士の方がいらして——さう仰つたんですがね、妾を小突いたり、押ししたり、ボンネットを被る暇もない位妾をお急ぎ立てになりましてね——本當にはき／＼した紳士でいらしますね。」

レオニイは彼女のお喋りを聴きながら考へ込んだ、若しも此の看護婦を断れば、そしてジャステインに夜中の看護を頼んだならば、彼は何んな事をしてでも彼女を助けて呉れるだらう——然しレオニイは彼の好意を受けるのはよくない彼は一日の大半を勞働に費すのだから、ゆつくり休息しなくてはならないと考へた。勿論彼女は良人が危険を脱するまでは看護しなくてはと決心した、がそれにしては誰か手傳つて呉れる者が必要であつた、彼女は看護婦に答へた。
 「さうですの、私共ですよ！」

ジャステインは悲し氣に頭を垂れた、レオニイは彼に近寄つて、心からの禮を述べた。

「お禮なんぞ仰有つて頂くと却つて恐れ入りますよ。若し御用が御坐いましたら御遠慮なく仰有つて下さいまし——出来る事でしたら、何んなりと致しますから——何うぞお忘れになりませんやうに！」

夜になつてから醫者が遣つて来た、彼は看護婦にいろいろ手當を命じた、看護婦は貴方より妾の方が手當なんぞの事はよく知つて居りますよ、と云はんばかりに頭を振つた。レオニイは良人の容態を醫者の眼で讀まうとした。

「まだ何んとも申し上げられませんが——非常な深手ですからなあ——もう暫くは何んとも御確答致し兼ねますでな。」と醫者が云つた。

十二日ばかりと云ふものはシャルルの容態は危かつた、醫者は日に二度宛やつて来た、レオニイは殆ど一睡もしなかつた、醫者はレオニイに幾度となく云つた「奥さん、餘り無茶をなすちやあ不可んですな、體を憂なしになさいませよ、一睡もなさらんではありませんか？」

「でも先生、良人が危い間は睡り度くても睡れませんわ——廣にはつた處で仕方が御座いませんの。」とレオニイは答へるのであつた。

モンヂエランの使の者が時々遣つて来てシャルルの容態を訊ねた、がモンヂエラン自身は姿を見せなかつた。或る時は使走りの小僧が寶鏡先拂でやつて来た、或る時は泥酔した男がやつて来て戸を破れる程叩いたり、大聲で喚いたりした、レオニイは彼等を素氣なくあしらひ良人は面會が出来ぬと云ふことをモンヂエランに呑み込ませやうと努め

た。頭シヤルルの容態は轉を越した、醫者は彼の全快を保証した、レオニイはこれを聞いて今迄のあらゆる苦勞や心配を忘れて悦んだ、そして子供達ばかりか、看護婦にまで挨拶した。然し看護婦は頭を振つた、「それはもう必ずよくなるですよ、然しまだく大切になさると不可ません——豫後が肝心です——安心なすつては不可ませんよ——何んな事が起らうとも知れませんが」と云つた。

レオニイは醫師の言葉を信じたが、果して醫師の云つた通りシヤルルは日に日に快方に向つて云つた。彼女は年寄りに心配させまいと思つて、シヤルルの危険の間はメルヴィイユ夫人にその事を知らせなかつたがもうその心配はなかつた。彼女はジャステインにメルヴィイユ夫人の許へ使に行つて呉れる様に頼んだ。ジャステインは悦んで引受けた、彼は急いで行つて來ると云つて出て行つたが、その通り間もなく歸つて來た、が彼の顔は曇つてゐた。レオニイはそれを見て叫んだ、

「ああ！ 又なにか不幸な事がありましたの？」

「御母堂は御病氣ですよ、」とジャステインが答へた。「息子さんが決闘なすつて、重傷を負はれた事を御存知なんです——誰か直ぐにお知らせしたらいいですね、それからすつと床に就いて居らつしやるさうですよ。」

「お氣の毒な！ あの方は私達の爲めに何も彼も手離して下すつたんですわ——もうほんの膺のみ膺のまま云つてもよい位になつて居らつしやるんですわ！ あゝ、ほんとに何うしたらいいでせうか？——人様のお世話にばかりなつて、人様の爲めには露ばかりも盡さないのですわ——あゝ——そのうちに——私達は又移らなくてはなりません」

んの——子供達を屋根裏部屋で育てなくてはならないんですわ！」

「何んですつて？ 此處をお出になるんですか？」

「まだ分りませんが——多分さうなるだらうと存じますの——兎に角彼の生命が助かつたのですもの、それを何より幸ひだと思はなくてはなりませんわね——ですけれどお姑さんは彼の容態を存じて居りましたらうか？」

「御存知ですよ、門番の女房の語に由りますと、モンジュランと云ふ方が貴方の處に遣した連中は、その後でメルヴィイユ夫人の方へお邪魔に上つたらしいですな。」

「あのモンジュランが——まあ——本當に何時になつたらあの男の名を聞かなくなるでせうかしら！」

彼女はジャステインに感謝した、ジャステインは彼女が此家を去ると云つたのですつかり暗い氣持になつて歸つて行つた。レオニイは看護婦を出さうと思つた、それと同時に彼女は醫者の方の擲ひの事も考へた、が彼女はそんな金を持つて居る筈はなかつた。然し彼女はまだ多少の寶石、立派な衣裳、シヨオル、以前の立派な家具の鹽りを持つて居た、彼女はそれらの品物を一つにして賣つて終はうと決心した。女にとつては可成大事なそれ等の品物を手離すのを、彼女は悲しいと思はなければ、惜しいと思はなかつた。「シヤルルが生命拾ひをしたんだもの——それを考へれば何んでもありやしないわ！」

看護婦には給料を支拂つて暇を出した。看護婦が居なくなると、彼等は幾らか氣がのびくした。レオニイはシヤルルが何か飲みたがつた時には自分の手で飲ませてやる事が出來たし、シヤルルはレオニイに勝手な事が云へるから

であつた。彼女は幾度となくシャルルに向つて、すいでの事で生命を棄てやうとした決闘の原因を訊ねた、最初のうちは流石に口を噤んで答へなかつたが、或る朝レオニイに問ひ詰められて頭頭事實を白状してしまつた。

「では、」と彼女は叫んだ。「貴方はモンジエランの情緒のために生命を犠に振らうとなすつたんですね——二人の情夫を持つ女なんぞのために——」

「ねえお母、僕は撲られたんだよ、僕はあんな女の爲めに決闘したんぢやあない、僕自身のためにやつたんだ。」

「でも悪いお仲間にお入りにならなかつたら、撲られる様な事もなかつたでせうに。これから氣をお付け下さいませよ。お友達のおふなりになるのはお止め遊ばせ——」

「あゝ、僕はもう——他人の兄弟になるのは絶対に止めだよ。」

「貴方はもうモンジエランさんとは御一緒ににお出かけにはなりませんまいね？」

「あいつは僕の悪い時分に見舞に來たかね？」

「いゝえ、使を遣した切りですよ。」

「お母さんは御存知かね？」

「えゝ、モンジエランが決闘の事を御苦勞にお母さまへ故意々々お知らせしたんださうですよ、それからずつとお母さまはお床に就いていらしたさうですよ。」

「なんてお喋り野郎だらう——僕は快くなり次第にお母さんをお見舞しなくてはならん——然し仲々起きられる様

にはなるまいなあ。」

「お醫者様は豫後が長いだらうと仰有いましてよ、氣を付けないと不可ないんですつて。」

「本當に退屈してしまふね。」

「貴方私達と一緒に居るのがお嫌なんですか？」

「いや、そんな事はないさ——然し、何か仕事が出来ないんだね。お前はいつも働いて居るぢやあないか——疲れ過ぎやしないかね。」

「でも妾働いてお金を取らなくてはなりませんもの——もう些つとも無いのですよ——貴方の御病氣は大した物入りでしたものね。」

「あゝ——働になつちまふ——起きられる様になつたら——何か仕事を捜すよ——オオルはまるで門番の子の様なみずぼらしい帽子を被つてるね——可哀さうに——お前は——お前は又日雇女の様な服装をしてゐるぢやあないか——ああ、運の悪い時は仕方がない——僕も悪かつたよ。」

「まあ昂奮なすつちやあ不可せんわ——御慮りになつたら——私達は——」

「さうだね——悲観した處で仕方がない——ヴァイオリンを取つてお呉れ、一つ弾いて見やう。」

間もなく彼はすつかり快くなつた、彼は外出が出来る様になると直に母親を訪ねた、彼女は床を離れてゐた。

「シャルルや！」と彼女は云つた。「妾はお前のために出来る丈の事をしましたよ——病氣の爲めにお困りだつたらう

ね——妾はレオニイが奇越した使に獲つて居た物をみんな渡してやりましたよ！」

「なんですつてー お母さん！」

「あ——多分レオニイはお前に黙つて居るのだからがね——他人に頼むよりは妾に云つて呉れた方がよいよ——しかしあんな泥酔漢なんぞを遣して欲しくは無かつたね——多分氣が鬱倒してゐるのでそんな事に氣が附かなかつたらうがねえ——もつと出来る丈の事をしたかつたが——もうこの通りほんの手廻りの物しか無いのだよ——」

シャルルは母親に禮を述べて、將來の事を約束した。彼は此の一件はモンジェランの細工だと睨んだ、そして今度は云ふ今度は本當に腹を立てた、がレオニイに話す程の事もあるまいと思つてゐた。彼は家に歸つて来て、家具を三人の足が動かしてゐるのを見て驚いた。

「ねえ貴方、レオニイが云つた。『私達は又引移らなくてはなりませんの、この家は私達には高過ぎますわ——私五階に二間を借りましたの——屋根裏部屋なんです——運河の近くにある建物です——家具をみんな入れる事は出来ませんから、その中幾分を賣りましたの——それに暫くなりて生活を支へる事が出来ずもの。』」

シャルルは此を聽めた、が直に快活さを取り戻して叫んだ「兎に角僕は金を儲けたら、もつと立派な家具を買ふよ。それでよいよ。」

一八 屋根裏部屋

シャルル一家の新しい住居は、運河の堤に沿ふた新築の立派な建物の中にあつた。然し彼等の借りたのはその建物の屋根裏部屋で、二部屋の中の一つは跡まなくては歩けなかつた、壁紙は剥がれたり、破れたりして居て如何にも貧し氣であつた。ペランジェルは「廿代に屋根部屋にあることの如何に樂しき。」と歌つて居るが、屋根部屋に特殊の魅力なんぞあるものぢやあない、二十歳代にせよそんな所に入つて居るのは仕方がないからである。

レオニイは此の新しい住居に足を踏み入れた時に眼が熱くなつて來るのを感じた、彼女は手早くそれを拭つて、家具を片付けるのに忙しさにして居た、小さなロオルは溜息をつきレオニイに囁いた。

「前の御家の方が良いわねえ！」

シャルルは隅の方へ腰を下ろし、フェリツタスを膝に乗せて小唄を教へて居た。

「早く花咲け、チュウリップ。」

レオニイは縫取りや針仕事を又始め出した、彼女は朝早くから仕事に掛つた、暮しを針仕事で助ける心算であつたが到底そんな事では足らなかつた。シャルルは金が無くなつて外へ出ても面白くなかつたので、餘り外出しなくなつた。彼は家に居る時はいつも得意の然し餘り上手ではないヴァイオリンを弾いて居た、そして彼はいつも口癖の様に

云つてゐた。

「僕は音楽家になるんだつけ——音楽の天才がある——が皆が僕を音楽家なんぞにして終つたのだ——僕は決して子供達には職業を強制せんつもりだ——辯護士にならうと醫者にならうと勝手だ——自由意志だ。」

レオルイは口を噤んで答へなかつた、そして悲し氣に破れた着物に包まされてゐるフェリックスを眺めてから、眼を擧げて天を仰ぐのであつた。

シャルルが外出して歸つて來ると、彼女はきつとモンジエランに會つたか何うか訊ねる事を忘れなかつた。そして會はなかつたと聞くと『まあ有難い！』と叫んだ。

「有難い？。いいさ——然し僕はある男に金を貸して居るんだ——だから——」

「ねえ、貴方、あの人は返す氣遣ひなんぞありません——棄てたものとお諦めなさいな。」

「棄てたもの——成る程ね——然し僕はある男に説明を聞かうと思ふんだ——何處に居るか知らんのだよ——あ——レオニイ、僕はある男と一緒に居るから安心してくれ、あいつには僕も怒つて居るんだから、だから會ひたいと云ふのは、あいつの頭を撲つてやらうと云ふ事なんだ。」

「貴方はさうは仰有るものの、妾よく貴君を知つてますわ——若しモンジエランにお會ひでしたら、直ぐお赦しになるに定まつて居りますわ、あんな人にお話なさる方がましですわ。」

彼等が屋根裏部屋へ移つてから二週間と経たぬうちに、シャルルの母親が死んだ。マルヴィイユ夫人の臨終の床

に侍したレオニイが、シャルルの不仕末を知らせないやうにしたので、マルヴィイユ夫人は兎に角事實を知らないで死んで行つた。夫人は息子の急を救ふために妙からぬ借財をしてゐたので、夫人の残した家財はそれを拂ふにも足りない位であつた、従つてシャルル一家の窮乏は前と變らなかつた。

貧しさが彼等を襲ひ始めてからレオニイは幾度となく兄の事を考へた、兄のアドリインは若い時分に外國へ行つた。彼女は可愛がつて呉れた兄を憶ひ出しては獨言を云つてゐた。「兄さんが財産を造らへたなら、お金持になつて歸つて來たら、あ——子供達は何んの不足もなくなるだらうに——」

然しその希望も空しく失はれてしまつた、アドリインは持船が破れたために積み上げた財産を悉く失つてしまつた、彼は無一文になつてハアザルへ着いた、そして叔父のフォルメル氏の遺産の中の彼の受取る分を至急送る様云つて來た、彼はその金で船を買ひ込み、ペリイの妹に會ひにも來ないで立つてしまつた。彼は立派な財産を造るまでは親類には會ふまいと決心して居たのであつた。

二ヶ月は何時の間にか経つた。シャルルはモンジエランに會はなかつた、ヴァンフロックやその外の遊中は僕を避ける様にした。或る朝、シャルルは散々ヴァイオリンを弾いてからブルヴァアへ散歩に出掛けた。階下へ降りて行つたロオルが嬉しうな顔をしながら歸つて來てレオニイに云つた。

「嬉しいわ——もう此の家つまらなかないのよ——あのいゝ人ね、前のお家の時の隣りの人ね——お母さま御存知でしょ、私達にいつもお菓子を下すつた人よ——」

「ジャステインさんの？」

「さうなのー ジャステインさんよ、あの人もこのお家へ来たのよー」

「まあ誰がそんな事を云ひまして？」

「あたし入口であの人に會つたのよーあの人が此處へ来たのよー」

「誰か訪ねて来なすつたのよ。」

「でもお母さま、あの人があたしに接吻して云つたのよ、もし用があつたら云つて下さい、又同じお家ですよ。」

「さう云つたの？ 不思議ねえ。」

「あの人にいらつしやいつて云つていゝの？」

レオニイは答へなかつた、彼女は考へ込んだ、がロオルは入口へ行つて叫んだ。

「ジャステインさん、入らつしやい、お母さま悦んでよー」間もなく彼は壁の上へ姿を現した、そして恥かしさうに立ち止まつた。

「まあ、ジャステインさん、何うしてお入りになりませんか？」とレオニイは若い労働者を迎へ辱ら云つた、「私達の部屋に吃驚なすつたんですの？」

ジャステインは少し前へ進み出て、手にした帽子を遮し乍ら呟いた。

「本當に！ 貴方がたには餘り良いお住居ではありませんな！」

「妾は我慢するにしましても良人には氣の毒で御座いますの。でも暫く我慢しなくてはなりませんわ。小供が御座いませぬければ、何んな貧乏にも堪へられますけれど——小供達の事を考へますと、妾——」

彼女は顔を外に向けて涙を拭つた、それから調子を變へて云つた。

「貴方が此の建物へお越しになりましたつて本當で御座いますの？」

「さやうです、昨日から越して参りましたので——丁度お向ひに居ります——貴女がお移りになりましたから——あの家がいやになりました——貴女の御仕事をなすつて居らつしやる處を見る癖がついて居りますので——私はいつも窓から貴女を見て居りました——このお部屋の前が空いたので直ぐ越して参つたので御座います——が——奥様は

——私が直ぐ御近所に居りますのが御不快でいらつしやいませうか？」

「何うしてそんなことが御座いませう？——妾の病氣の折の御親切は忘れませぬわ。」

「あゝ、今度も御用をして差し上げられましたら、本當に満足で御座います、幸福に存じます——何んな御用でも致します——」

ジャステインは身震した、レオニイは眼を擧げて彼を凝と見詰めた、彼は眞赤になつて口を噤んで終つた。レオニイの顔には醜しい感とした色が浮んで居た、彼女は始めて彼の深刻の隠れた動機を疑はしく思ひ出したのであつた。暫くの間二人は沈黙してゐた。彼が益々當惑して行くと共に、彼女は益々醜しくなつて行つた。彼女はジャステインに坐る様に云つたが、彼は何時までも立つて居た。

「何うしてお掛けなさいませんの、ジャステインさん？」とレオニイは云ひ乍ら再び仕事に取り掛つた。

「奥様——お邪魔になりますし——それに私はこれから仕事に参るので御坐います。」

「貴方は黒檀細工の仕事をなすつて居らつしやるのですつてね？」

「さやうで御坐います。」

「お母さんはまだ居らつしやいますの？」

「はい、母に妹が二人居ります。」

「まあ、結構ですこと——貴方は勤勉でいらつしやいますし、規則正しい習慣を持つて居らつしやいますから、まづと成功なさいませわ——あの、貴方はこれから良人の居ります時お見え下さいました、貴方の様な御深切なとお近付きになるのを喜ぶこと存じますわ。」

ジャステインは稍辭を頼めたがやがて答へた。

「奥様、私は自分をよく心得て居ります、私は労働者で御坐います——又私は貴女がこの様な屋根裏にいつもお住居になる方だと存じません、御主人と私とは身分が違ふやうに存じます。」

「そんな事があるのですか！ 貴方の様な労働者は宅の文際ふお友達より何れ程働つた、立派な方か知れませんか——レオニイは喋り乍らも溜息をついた、再び二人は沈黙した。眼を伏せたまま立つて居るジャステインは出て行きたくもあり、出て行きたくもなかつた。やがて彼は眼を伏せたまま口籠つた『では失禮致します、奥様。』」

間もなく冬になつた、レオニイはフェリックスに暖かい着物を買つてやる事が出来なくて、死ぬ様な苦しい思ひをしながら夜分も針仕事を續けた。シャルルは繩を叩いた、鞆で燧突を撲つたり、床を蹴つたり、自分を悪奴だの、不吉な鴉だのと罵つたりした、その揚句は散歩に出て行つて、下らぬお喋りを聴いたり、政治向きの諷刺畫を見たりして歸つて来るのであつた。或る日、彼がさうした散歩から戻つて来ると門番が彼を呼び止めた。

「貴方はヴァイオリンをお弾きださうですが——多分音楽家でいらつしやいませうな？」門番は右手を屋根部屋に住む人間と見て、帽子を被つたまま云つた。

「それが何うしたんだね？」とシャルルは打切聲に答へた。

「私の友達が——つい近所の——サン・ルイ街にゐる給仕ですがね、ルウ・ド・ラ・ツウルの方を連れて行けば——」

「成程、然し君の話したいのはなんだね？」

「友人の、給仕をしてゐるブレイアルですがね、或は私の處へ訪ねて来てゐるのを御覽になつたかも知れませんが——小さな瘦せた——」

「いや！ 僕がブレイアル氏を知りませんよ——しかし何か御用ですか？」

「まあ斯うなんです、彼は今朝私に逢ひに来たんですが、ブレイアルの御主人の娘さんが結婚するんださうです——もう二十九になる、頗る不美人ださうです、しかし大した持参金があるさうですよ。」

「然しヘルトランさん、それが又僕に何んの關係がありますか？」

「まあ待つて下さい、そのブレイアルがこの十日ばかりのうちに娘さんが婚約するんださうです、明日は主人が花嫁を親類一統に紹介するので舞踏會をやるんですよ。感んな舞踏會でせうな。感で私は一晩中舞踏曲を弾いて呉れるヴァイオリン弾きを探してゐるんですがね、多分二時三時までには舞踏會があるでせうな。お心當りはないでせうか？」
 つて私に訊ねるんです。最初私は別に心當りはないつて答へたんですが、ふと貴方の事を考へました。でブレイアルに、此の五階にヴァイオリンの名人が居るつて云つてやりました。するとブレイアルが喜びましたね、今晚入時に来るから是非とも御返事を伺つて呉れと申すんです——お禮は十五フランださうです。然しね、さう多くもありませんが、まあ其邊ぢやないかと思ひますよ——尤も音楽家が充分腕を振へるやうに晚餐を出すさうです——で私は返事を伺つてやらうと約束したんですが、如何でせう？——多分貴方は——」

「いや、僕には外の人間を雇らせる音楽なんか弾けませんよ！」とシャルルは感な顔をし乍答へて、階段を上つた。門番は彼の後姿を眺め乍ら叫んだ。

「驚いたね、何うも變ぢやないか——十五フラン儲けるのが嫌だなんて、あの人の小さな娘の靴に穴が明いてゐたつて——一體何を雇らせる心算なんだらう、感でも雇らせるのかしら？」

シャルルは自分の部屋に入つた、妻のレオニイは眼を眞赤にしてゐた。四五日この方フェリックスは何處か悪いらしく、元氣がなくなり、遊びもしなかつた、レオニイはフェリックスが風邪を引くのを心配して彼を確りと抱きしめて居た。小さなロオルは指に息を吹つけ乍ら部屋の中を歩き廻つて暖を取つてゐた。シャルルはこの有様に胸を貫

かれる様に感じた。彼は片腿に坐つて呟いた。

「ああ——兎に角僕は弾けるんだ——十五フラン——それでも充分だ！」

彼はレオニイの方へ近寄つて云つた。

「お前は針仕事で一日に十五フラン稼げるかね？」

「まあ——十五スウも漸々ですわ——が何うして又そんな事を仰有るの？」

「實はね——今し方門番が舞踏會で一晩舞踏曲を弾いて呉れば十五フラン出すと云ふ話をしたのだ——」

レオニイは氣遣はし氣に彼を眺めた彼女には、寒がつて居る小供達に必要なものを買ひ求めてやる爲めならば、何んな仕事でも感しいとは思はれなかつた。

「それで——貴方何んと御返事になりました？」

「お前には解るだらうが、餘り愉快な事ぢやない——僕は人を雇らせるためにヴァイオリンを習ひやしなかつたんだ。」

「さうですわね。」とレオニイは悲しさに云つた。「妾何んなに不愉快な事か解りますわ——然し——時に依ると私達は感みに習つた事で悦んで生計を立てなくてはならない感な場合もありますわね。貴方は——」

「僕は斷つたよ。」

彼女は黙つたまま眼を伏せたそして小兒を確く抱きしめた。空腹を感じて來たシャルルは立ち上つて戸襖を開けた

が其處には一塊のパンがあるばかりであつた、彼は叫んだ。

「喰べるものは何處だね？」

「もう賣る着物がありませんの——もう何にもありませんの。」

「あゝ！モンシエランの悪黨め——若し會つたら——何うしてやらう——こんな破目に陥しやがつて——僕から借金して置き乍ら——」彼は齒を喰ひ織り乍ら咬いた、暫くの間パンを眺めて居たがやがて彼は立ち上つて叫んだ。

「よし！ 僕は奴等を蹴らせてやらう！」

レオニイは頭を擧げた、彼女の眼は輝いた「でも貴方門番は？——お断りになつたんなら——」彼女はせき込み乍ら叫んだ。

「いや、あの男の友達のブレイアルはまだ歸つては来るまい——ロオルさんや、直ぐ門番の處へ行つて、お父さんは今朝のお話を承知しましたつて云つて来てお呉れ。さあ、急いで、ロオルさんや、急いでね。」

ロオルは直ぐ出て行つた、ロオルを見送り乍らシャルルは云つた。「あの場所で承知して終はなかつたのは不味かつたな——熱心の續に見えん。然し行く先きの道中は随か僕の知らん道中に違ひない——お前の云ふ通り醫があつたらそれで身を助けなくちやあならんね。」

ロオルが戻つて来た、彼女は丁度ブレイアルカベルトランと話をして居る處へ行つたのであつた、ベルトランはシャルルの返事を聞いて云つた。「では明日の八時ですよ、」そして主人の住所を紙片に書いてロオルに持たして遣つ

た、ロオルはそれを父親に渡した。シャルルは取る手選しと其處書きを讀んだ、「ティグル氏、以前毛皮商」彼は處書きをポケットに收つて言つた。

「いい捕獲だ！ 僕はこのティグルと云ふのは僕の知らん人だよ。」レオニイはホツとした、彼女の顔は幾らか明るくなつた、子供達は母親の微笑を見たので元氣付いた。その夜遅くまでシャルルはヴァイオリンを弾いて練習した。がその夜に限つてヴァイオリンの音はレオニイの耳に快く響いたのであつた。

次の日、レオニイはシャルルの着て行く服の手入れに忙しかつた、彼女は良人を人中へ繰り廻し服装で出してやり度くなかつた、それに服装がちやんとして居ると、下手な音楽も幾らか引立つと云ふ事を知つて居た。彼の服は眞新らしくはなかつたが、いろ／＼と手入れをした結果すつかり見栄えがよくなつた。シャルルは早くから仕度を整へた。今迄になく彼が一家のために働くことと云ふことが彼女を心から悦ばせた。やがて夜になつた。

「貴方時間を間違へては不可せんわ。」とレオニイが云つた。

「勿論さ——然し僕は時計を持つて居ないんだよ。」

「ロオルさん、ジャステインさんの處へ行つて、若し居らしたら時間を伺つてゐらつしやいな——」

「はい」ロオルは直ぐ歸つて来た。まだ時間があるのでシャルルは知つてゐる舞踏曲を片端から練習した、やがて時間になつた。彼は出かける仕度をしてヴァイオリンを抱へて、子供達やレオニイに挨拶したレオニイは彼に優しく叫んだ。

「お歸りになるのを待つてますわ。寝返りませんわ。」
 「そりや不可んよ——眠つてお呉れ——知つての通り五時か、六時に終るんだから——疲れるだけ莫迦らしいから眠つてお呉れ——さよなら——裝飾音さへちやんとやつてのければ、満足なんだかねえ。」

一九 舞踏會

シャルルはヴァイオリンと弓を露出のまま小脇に抱へて、サンールイ街の方へ歩いて行つた、彼は足を運び乍ら繰返した。

「まづ二番目にはエター次ぎにはポオルだ——それから——よし、よく憶へてゐるぞ、問題は拍子に合ふカドリイルを知つて居るか何うかと云ふ事だ——いや、困つたな——思ひ切つてやつちまへ——テイグルなんぞあ僕程も知つては居るまい——僕は最後に「エナアヴァン・ファンファン・ラ・チウリツプ！」をやらう——こいつは僕のお得意だから——僕は十五フラン欲しさに舞踏會のヴァイオリン弾きに行くんだ——ああ！お母さんは早く死んでよかつたかも知れない——こんな事を聞いたら——何んなに悲しがるか解りやしない！——モンデエランの悪黨めが——あいつは僕が臥て居る間にお母さんから僕の名を騙つてお金を借りやがつた！——今度會つたらこつびどい目に逢はして呉れる——さあ、此處だな——思ひ切つて入つて行くか——可哀さうな子供達の事を考へやう——さうすりや

あ強く勇氣が出るだらう——」

彼は入口で門番に聲を掛けた。

「テイグル氏のお住居は？」

「左側の二階です——それに燈が點いて居ますから。」

シャルルは二階へ行つて鈴を鳴らした、容態振つた給仕が悉く扉を開けたが、彼のヴァイオリンを見て叫んだ。

「ああ、貴方はペルトランの建物に居られる音楽家でいらつしやいますな？」

「左様です。」

「さうでしたか——貴方を御纏みしたのは私でしたよ——ペルトランと御禮を定めたんですよ——御承知でせうが、十五フランです——」

「さう、さう、存じて居ります。」

「私がお世話しますよ——お好きなだけ酒を召し上つて下さい——咽喉がお渴きでしたら御遠慮なく仰有つて下さい——音楽家の方は砂糖水をお用ひですか——」

五十格好の身の丈の四呎、五吋ばかりの、綺麗な假髪を被つた、黒い髪を生やし、脚の太い、赤眼をした男が應接間から出て来て云つた。

「何方かね、ブレイラル？ 花婿が見えたのかね？」

「いえ、樂師で御座います。」

「そりや結構だ、樂師かい、直ぐ踊ることにはやう、娘はもう踊りで夢中ぢやよ。さ、さ、お入りなさい。」

テイグル氏はシャルルを應接間へ導いた、餘り大きくない應接室にはもう三十人以上の人達が詰め掛けてゐた。不格好な服装だの、下手なお化粧を見て、シャルルは餘り立派なお客ではないと見當を附けた、彼は新しい、彼の手に餘る様な曲が注文されるやうな事はあるまいと思つて、ホツとした。

「樂師が参りましたよ——皆さん踊らうではありませんか——」テイグル氏は應接間へ入るや否や叫んだ。濺足の叫きが一同の唇を洩れた。背の恐ろしく高い婦人が進み出てお客の足の間をじろく／＼と眺め廻した、テイグル夫人が良人を捜して居るのであつた、夫人はテイグル氏を見附けて云つた、

「何處へ樂師を案内しませうか——場所がありません——お客様が大勢ですもの——まだ踊は参りませんか？——フロルが待ち遠くがつてぢりてゐますのよ——」

應接室の一隅に離く的事で樂師の席を設けた。ブレイラルは一生懸命に椅子を片附けたり、肘掛椅子を並べたりし乍らンヤアルに云つた。

「貴方は——その譜本を——その載せるものが御入用でせうね——」

「いや、入りませんよ、見ないでもやれますから。」

「見ないでなさる！ 驚きましたなあ——」

ブレイラルは主人の方へ向き直つて、彼の耳に叫んだ、

「此の樂師は暗記で弾くさうで御座いますよ！ ベルトランは偉い音樂家を世話して遣しましたなあ——」

「ブレイラルや、お前早く砂糖水を持つといで——」と應答な調子でテイグル夫人が叫んだ。

「はい、長まりました、ブレイラルは出て行きしなにシャルルに叫んだ。

「咽喉が渴いたら、御遠慮なく私に云つて下さい、いゝ酒を持つて來ますから。」

シャルルは背の低い、無格好な、赤い吹出物だらけな、黄色い顔の、低い鼻が、兩側から横迫る、飛び出した頬の爲めに動きが取れなくなつて居る若い女に氣が附いた。彼女は絶えず室内を歩き廻り乍ら女關の方を眺めては叫んだ。

「まあ、何うしたんでせうね！ まだ來ないわ——何をしてゐるんだらう！——」

これがこの家の娘フロオル・テイグル嬢であつた。もう可成の年になる、踵から足の先まで角張つた、鼻や頰の光つた紳士が、彼女に近附いて云つた。

「可愛い姪や！ お前と最初の舞踏をやらうかな？」

「チエザアル叔父さん、私ね、最初の舞踏は約婚した人と踊るつもりでしたの、だからもうお二人も申し込んで下さつたのをお断りしましたの、でもね、あの人かまだ來ませんから、叔父さんのお相手しますわ。」

「さうかい、では手袋を絞めるからな。」

チエザアルはポケットから緑色の手袋を引つ張り出して、長い、既くれ立つた指を押し込んだ。シャルルはヴァイオリンの調子を合せ始めた、一同は活氣附いた、知らぬ人が見たら生れて始めてヴァイオリンの音を聴く手合かと思つたかも知れない。

彼等は並んで、シャルルは思ひ切つて憶えてゐる曲を弾いた、最初のカドリイルはまづ無事に終んだ、二番目になると一人の青年が叫んだ。

「裝飾音を入れて下さいな！」

「はい、——」とシャルルは答へた。

「カザアリイル・セウルを纏む」とそれが大好きなチエザアル叔父さんが叫んだ。二度目のカドリイルの最中、テイグル氏はシャルルの直傍に居る婦人とお喋りをしてゐた、シャルルは次の様な二人の會話を耳にした。

「妾はねえ、お宅のお婿さんとお近付きになるのが待ち遠しう御坐んすよ。」

「間もなく参るでせうよ——何かフロオルに贈り物でもするので忙しいんでせう——いや實に快活な人物ですよ！」

——愛嬌もよし、萬事が華美でな——實に魅力のある人物ですわい——立派な、醜の黒い、苦味走つた男でしてな、退役軍人ですよ！」

「勳章は？」

「いや持つてませんよ——軍隊を出る時に貰ふ事になつてたんださうですよ。」

「士官ですの？」

「さうですよ——大佐になる所だつたんですがね——大將と決闘したんです——實に珍らしい人物ですよ。」

「然し大分話が早くお定まりでしたのね——お婿さんとお知合ひになつてから間もない様に存じますが。」

「その通りですよ——二ヶ月程前でしたかな——ゲイテエ座で知り合ひになりましたんです——俺は妻と娘を連れて参つたんですがね——俺が一寸廊下へ出て戻ると——一人の男が俺の隣に頭張つとる——妻や娘が何んと云つても耳に入れないのですわい——俺も嘸鳴つたり、騒したりしたがビクともせん——出方を呼びに行かうとしますと、立派な人物が現れて、其奴の襟首を掴んでポンと抛り出して了つたんです。俺はその男らしい態度にすつかり感心しました、厚く禮を述べました——それが始まりでな、歸りには一緒に芝居を出しましたよ、禮儀の正しい人物ぢやで俺が是非訪問して呉れるやうにと申しますと、その次の日に参りましたよ、それからずつと交際しておりますが、俺はそのうちに氣が付きましたがな、先方は娘に氣があるらしい、フロオルはフロオルで斯う云ひ出しました。『あの方は私の理想の人よ、あの人と一緒になれなけりや尼になる』つてな。——そこで俺は早く話を定めた方がよいと考へましたし、それにエミイルも（これは婿のクリスチャンネエムですが）さつぱりした人物です。『貴方は娘を何うお考へかな、俺は御覽の通り餘りのない人間ぢや、遠慮のない處を申しますが——フロオルは結婚しなくちやあなりませんが、持参金は六万フランです、俺達が死ねば遺産は全部あれのもんですが——如何ですか、結婚なさるかな？』と俺が云ひますと、エミイルは驚く考へてましたが斯う叫びました。『結構ですな——其處で俺が先方の財産を訊ねる

と、これが又さつぱりとした男らしい返事だな。希望の外は何もない、と申します。勿論俺はもつと外に物色しやうかとも思ひましたが、そんな話の最中にフロオルが氣絶してしまひましたな。それに無一物ですが、家柄は立派ですわい——こんな事で話が急に進みまして、一週間経つたら結婚式を挙げる事に決めましたのですよ——もう準備も出来ましたよ——結婚式の衣裳は最新流行の物で、大分金を掛けましたわい——評判になるでせう——や、婿の聲が聞えましたな。」

花婿の御入來に一座は騒めいた、踊つて居たティゲルは立ち止まつて叫んだ。「あら——いらしたわ——聲が聞えましたわ——」彼女は背の高い、黒ずくめの紳士の方へ走つて行つた、紳士は兩手に花束を持つて悠々と入つて來た、彼は一同に向つて愛想よく微笑を浮かべ乍ら會話した、そして恍惚として彼を眺めて居るフロオルの掌に接吻し、花束の一つを彼女に、も一つの方を夫人に贈つた、彼は如才なくティゲル氏の肩を叩き、家族の人達に挨拶して通り、叔母さん達に接吻し、やがて花婿がモンジエランであるのを知つて呆然してゐるシャルルの前へやつて來た。挨拶や紹介は一段落つて、「さあ——踊りませう——始めやうぢやありませんか——」と云ふ聲が起つた。

「婿のエミール・モンジエランが娘フロオルと組みますよ」とティゲル氏が叫んだ、「俺はクロオタン夫人と踊りますよ——」

然しシャルルはモンジエランを獲つと目詰めた儘、石の壁に固くなつてゐた。

「さあ、ヴァイオリンを聴きますよ」と二三人が叫んだ。その時モンジエランは彼を見詰めてゐるシャルルに氣が

付いた、彼はヴァイオリンの沈黙した原因を覺つたので、直ぐに馳せ寄りシャルルの手を握り乍ら叫んだ。

「やあ——君は勇敢なラ・ヴァルウルぢやなかつたか——」

「ははあ——貴方はこの樂師を御存知ですか？」とティゲル氏が吃驚して二人を眺めながら云つた。

「いや、意外でしたよ」とモンジエランは叫んだ、「この男は舊い騎兵でしてな——私の部下でした——勇敢な男で、私の生命を二度救つて呉れましたつけ——いや意外でしたよ、此の席でラ・ヴァルウルに會はうとは——」

「ああ、では貴方の部下でしたの！」とティゲル夫人が云つた、「それで解りましたわ——その間モンジエランは意味あり氣にシャルルを眺め乍ら低い聲で叫んだ、

「黙つて居ろ——莫迦な事を云ふなよ——」

「モンジエラン、君は悪黨だ——實に悪黨だ——」

「叱つ——」

「君は僕の名を騙つて母から金を借りたらう——」

「だから俺はこんな事をしてるんだ、それを返したいばかりにやつてるんだ。」

「君はもう結婚してるんだから、あの婦人とは結婚出来んぢやあないか。」

「君の知つた事つちやないよ——俺の仕事だ——俺の女房は死んだ事になつてる——さあ早く逃げよ——」

「然し——」

「おい黙つてろ——彼らの約束だ？『十五フランだ。』」

「ぢやあ三十六フラン儲けさせてやるよ。』」

「然し、僕には——」

モンジエランは耳打ちを止めて、シャルルから離れ乍ら云つた。

「ああ さうか！ 貴族の家族が一同無事だと聞いて僕も安心した！ さあ、軍隊で我々を悦ばせた奴を弾いて呉れ——では始めませう、フロオルさん」

モンジエランは許婚のフロオルと向ひ合ひ、それに並んでティグル氏とフロウタン夫人が向ひ合つた、踊り手はヴァイオリンの合圖を待ち切れなくなつた、シャルルは暫くの間躊躇して居たが、やがて思ひ切つて樂器を取り上げモンジエランのために弾き出した。

「素敵だ！ まるで天使の様に弾くわい！」とモンジエランは絶えず叫んで居た。

「あの樂師は『フアンフアン・ラ・チュウリツプ』ばかり弾き度かりますよ！」と、傍に踊つて居た青年が云つた。

「いや面白い曲は何度聞いてもいゝものですが、僕は兎に角あの旋律が一番好きですよ。」

彼が高飛車に出たので一同は彼の意見に同意を表した。舞踏は終つた、モンジエランはフロオルを腰掛へ連れて行つてやつた。誰、毛皮商は親類の人達を次々／＼抱へて、「何うですかね、踊の人品は？——立派でせう——あの物價た態度は何うですか、立派な社交界の人物でさあね——一見見りやあ解りませあね！」と云つてゐた。

ティグル夫人は、踊の體格を讀めた、夫人の云ふ處に由ると踊はベリイ一の美男子であつた、と云ふのも夫人がティグル氏の體格に就いて日頃不滿を感じて居たからであつた。勿論親類一統は斯う云ふ場合に相應しい挨拶をした。フロオルの傍に坐つて居た婦人が彼女に叫んだ。

「あの於煙草の臭の悪い方ですのね！」

「そんな事構ひませんわ！」フロオル嬢は怖ろしい眼で彼女を睨み附けたので、その婦人は眼を伏せて、口籠り傳へ云つた。

「失禮しましたわ！」

舞踏が終るとブレイラルがやつて来て、シャルルの腕を引つ張つた、彼はシャルルを玄關へ連れ出して酒をなみなみと注いだ杯を載せた卓の前に坐らせた。

「さ、飲んで下さい！ 水なんざあ御つちやありません。此のブレイラルの名に掛けて——私が處から注いで来たんですから。」

シャルルが息を入れてゐると、モンジエランが玄關の方へ遣つて来た、ブレイラルがシャルルの傍に居るのを見て、彼は云つた。

「客間でお前を呼んでるよ——親父さんが呼んでゐるんだ！」

ブレイラルは頭を下げて、急いで客間へ行つた。モンジエランはシャルルと話を始めた。

「何うした、シャルル君、此處で君に逢はうたあ僕も考へなかつたよー」

「僕も意外だ——御覽の通りの仕末さ。」

「君の様に落ち附いて弾けりやあ結構だ。」

「然しモンジエラン君、僕には解らんね、——何だつて君はあんな金持の間へ入つてるんだい、その娘と結婚するなんて？」

「君に解らん——最初はテイグルの處へ時々遣つて来て御馳走にあり附かうと云ふさ、面白い企みだつたんだ、處が突然あの化物が僕に惚れ込んだんだ、親父は六万フラン附けるから買つて呉れつて云ふんだらう、今更後を見せる譯にやあ行かんぢやあないか？」

「結婚してゐるつて云へばそれ迄ぢやあないか？」

「それ程莫迦ぢやあ無いさー」

「然し君はあの女と結婚は出来んよ。」

「僕は御馳走になつたり、お世辭を並べたり、御禮儀を伺つたりして居る間に、あの親父から金を借りたんだ——親父な奴さー」

「然し君を知つてる者があつて——」

「な、僕はリオレで結婚したんだ——あの處中はサン・クロオの向うへは足を踏み入れた事のない奴等だー」

「然し」

「叱つ——フロオルが僕を捜してやがるー」

フロオルが元氣へ遣つて来た、彼女は自分で「無邪氣」と思つて居る、七面鳥を絞めた様な聲で叫び乍ら、モンジエランの方へ馳せ寄つた。

「貴方、そんな處でなに居らつしやるの、應接間へいらつしやいな？」

「僕は昔の部下の驃騎兵の勢を頼つて居た處ですよ——酒を飲ませましてね——此の男は僕が部下の中ぢやあ一番目を掛けてやつて居た兵でしてね——僕の馬と同様に可愛がつてやつたんですー」

「でもあたし貴方が居らつしやらないと不満ないわー」

「あゝ！ 貴女は本當に可愛いー」

「それにあたし、ワルツを少し踊り度いのよー」

「少しなんてー 一つ思ひ切つて踊りませう！ 僕のワルツは野蠻人の様ですよー」

「あのね、クロドミイルさんの娘がワルツはあたしより上手だつて威張つてるのよ。」

「二つワルツを踊り乍ら、その娘さんを床の上に平伏らせてやりませうか？」

「あら！ あたしあの人より澤山廻らうと思ふの、あたし眼が廻つたら、貴方仆れない様にして下さるわねえ？」

「僕は貴女と一緒に舞びたいものですよ。」

「まあ、いやよー 貴方あたしの親類を何う思つて？」

「愉快な人達ですわね！」

「みんなもさう云つてますよ。」

「僕は何時でも人氣男でしてね——さあ、ワルツに行きませうか——おい、警備兵ワルツを踊りやつてくれ、シャムパンを弓にぶつ掛けて威勢のいゝ處をやつて呉れ！」

彼はワルツでもやつて居る様な格好にフロオルを擁し乍ら廣間の方へ戻つて行つた。シャルルは狼狽した終つた、彼はワルツは一つも知らなかつたのである、一方未來の花婿と花嫁は廣間の真中に陣取つた、やがてモンジエランは叫んだ、「さあ皆さん、お仕度をおひます！」シャルルは絃の調子を合せた、が何時までそれが續く事やら分らなかつた。その間ティグル氏は馳せ廻つて「婿が娘と踊りますでな——いつまでも踊りますでな——と叫んでゐた。

ヴァイオリンは依然として調子を合せて居た、踊り手は待ち切れなくなつた、モンジエランは恐い顔をしてシャルルを睨んだ、「ラ・ヴァリニウール！ 貴様は一晚中そんな事をやつてる心算か？——ヴァイオリンをギタアにするつもりか？」

絶命のシヤアルは「トラ、ラ、ラ、ラ」を弾く事に定めた、が感、踊りが始まると、踊り手は「トラ、ラ、ラ」が三拍子でない爲めに非常に面喰つて終つた。然し舞踏の上手なモンジエランは平氣で、跳躍ダンスを始めた、そしてまご／＼してゐる踊手の間へフロオルをピョ／＼と跳ばせてやつた。

「君は外のワルツを知らんのかい？」と一人の踊り手がシャルルに近附いて云つた、彼は返事の代りに「ツラ、ラ、ラ」を一層高く弾いた。がモンジエランは踊りを止めなかつた、彼はフロオルを宙に抛り上げて一同の視線を集めたティグル氏は叫んだ。

「何うです、素晴らしいもんですなあ！ まるで鳥の機だ——實に恐れ入つた！」

フロオル嬢はもう小さな櫛を三つ落してゐたし、顔は汗でツル／＼と光つて居た、がそれでも彼女は止めやうとは云はないで喘ぎ乍ら云つた。

「クロツドミール——さんは——きつと——吃驚——したでせうねえ——」モンジエランは邪魔な物を蹴つたり、小突いたりするので満足した。

「トラ、トラ、トラ、ラ、ラ、ラ——實に素敵だ！」

ワルツと云ふよりも、バレエの最中に一人の老紳士が廣間に入つて來た。ティグル氏は彼を迎へて叫んだ。

「これは、これは——リシヤアルさんでしたか——よく入らつしやつた！」

「いや何うも！ 俺は今朝リヨンから來ました、貴方のお手紙を見て直ぐお伺ひした次第でな。」

ティグル夫人は新しい客に挨拶をした、リシヤアルはティグル夫妻に向つて云つた。

「では貴方はフロオルを結婚させるのかな。」

「さうですよ、もう話が定まりましたでな——一週間後に式を挙げる心算ですよ——フロオルは今未來の夫と夢中で

「睡つとりますよ——もう二十分にもなりませんが——」

リシャルド氏は未来の花婿を眺めた、彼の顔にはモンジエランを見詰れば見詰める程憂鬱な表情が噴き出て来た。

「さて、貴方はうちの婿を何うお考へですか。ディグル氏がリシャルド氏に訊ねた。

「俺には何うも解せんぞな——不可能の事ぢやからな——」

「不可能ですつて———それから其處に居りますよ——俺が指してあげても可い——」

「お名前はな？」

「エミール・モンジエランですよ。」

「その男ぢや——俺はその男を知つとりませんがな——然し貴方は冗談を云つとられるんぢやらう——あの男は結婚しとるからな。」

「えつ——何ですつて——結婚しとる？」

「さやうですわい、既に結婚しましたよ、俺が證人になつたんぢやから確さ、——それにあの男の細君に會つたのは四五日前の事つちやからな——」

「まあ——恐ろしい——」ディグル夫人は椅子へ戻り、その椅子はクロドミール夫人の方へ倒れ掛つた。ディグル氏は絶望して叫んだ、「お———婿はもう結婚しとる——」この言葉は口から口へと傳へられた、若い夫人達は顔足の色を浮べ乍ら互に意味あり氣に顔を見合せた、若い女と云ふものは外の若い婦人を嘲笑する事の出来る程な機会を

この上もなく悦ぶものである、ディグル夫人は眼を遮した、ディグル氏はワルツを踊つてゐるモンジエランとフロオルの方へ脚を寄せ寄つた。

「止めろ——ワルツを止めろ——悪黨め——」

「でもお父さん、あたし幾ら踊つてもなんともなくつてよ——」フロオルは跳び上り乍ら答へた。彼の毛皮靴先生は娘を拘まへる事が出来ないで譯の解らぬ事を喚いてゐた、事態容易ならずと見て取つたチエザアル氏がシャルルの方へ走つて行つてヴァイオリンをいきなり取り上げたので、舞踏は自然中止された。

「何うして止めたんだ？ もつと踊る心算だつたが。」とモンジエランが叫んだ。忿怒の爲めに口がよく利けなくなつたディグルは友人のリシャルドを前に押し出して囁くの事で云つた。

「君はこの紳士を憶えて居るか？」

モンジエランは新來の客を凝視してゐたが、少しく顔を歪め乍ら答へた。

「何方ですか？」

「モンジエランさん、この俺には見覚えがないんですかい？ 貴方がリヨンで今から六年前前に結婚された時の證人になつた俺がお解りにならんかな？」

「リヨンで結婚した——」フロオルが地聲で叫んだ。「そんな事があるんですか？——みんな悪口よ——ええお父さん——何うしたんです？——何がなんだか解りやしないわ——」

「娘や、この紳士はお前を隠しとられたんぢや——われ／＼を救いたんぢや——何んとか返事をされたら何うですな——結婚なすつたんかな？」

「僕は結婚しましたよ、その通りです——然し今の僕は僕夫ですよ——」

「嘘だ——とリシヤアルが答へた、俺は最近に貴方の細君に會つたがピン／＼とられたからな！」

「そんな事があるものか——奴等の妻は死んだと書いて遣した手紙が嘘かも知れんが。」

「君——とチエザアル叔父がモンジエランの方へ一歩進み出て、嚴しい顔をして云つた。三十年間正直に毛皮取引をやつとつたこの家は、その様な事をやる場所ではないと云ふ事を御存知ないかな——」

「解つたよ——貴様の阿呆だつてえことはよく解つたよ——貴様等は悪魔に喰はれちまへだ——僕は結婚なんぞあ御免蒙るとせうよ、ぢやあ左様ならだ——」

「此奴を叩き出せ——と若い連中が總立ちになつていきり立つた、フロオルは母親の傍で正氣を失つてゐた。

「俺を叩き出すと抜かした奴は何奴だ——と叫び乍らモンジエランは部屋の中へ飛び出した、出て来い、目に物見せて呉れるから——シヤアル君、吾輩の左に立ち給へ、名譽の退却を致さうぢやないか——」

最初から何んな事に終るか大概見當をつけたシヤアルはこつそり逃げ出さうとした、が彼はチエザアルの取り上げたダアイオリンを戻して貰ひたさに愚圖／＼して居た。氣が付くと彼は若い連中に取り圍まれてモンジエランと一緒に戸口へ押し出されやうとして居た。モンジエランもシヤアルと同様に群衆を押し返し、包圍を突破しやうとして居

たが無駄であつた。チエザアル氏は入口でダアイオリンをシヤアルの方へ出して云つた「君のダアイオリンを渡すよ。」シヤアルがそれを受取らうとすると、横合からモンジエランが手を出して、取るが早いかチエザアルの鼻柱へダアイオリンを叩きつけ、それを滅茶／＼に踏して終つた。「こいつを喰らへ——俺の左様ならだ——」

この所變は一同を怒らせて終つた、斯うなつては譯かな手段を用ゐて二人を戸外へ出す譯には行かなくなつた、彼等は散々な目に會はされて往來へ抛り出された。

「畜生め——あんな野郎がリヨンから遣ひ出して來なけりやあ、芝居がうまく運んだのこ——女房がピン／＼してゐたあ——ちえつ——おい、シヤアル君、何うした？」

「撲られて、體中がひり／＼するよ。」

「太い奴等だなあ——」

「それにダアイオリンは——」

「さうだつて、俺があつたチエザアルに喰はらせてやつたつて——いよさ、あの毛皮屋から借りた金が變つて居らあ——飲んであの化物のフロオルの事をさつぱり忘れつちまはら——景氣よく飲んでね——なあに、那のダアイオリンを買つてあげるよ——さあ、元氣を出して歩いたり——」

モンジエランはシヤアルの腕を執つた、シヤアルはモンジエランの云ふ通りになつて、彼と一緒に當てもなく歩いて行つた。

二〇 世は情

レオニイは、初めて自分の腕で一家を養つたシャルルが、それに元氣付いて、今までの生活を改め、子供達のため一牛腰命に働く様になるかも知れぬと考へた、斯うした惨ない希望も彼女を久し振りで安らかな睡りに誘つて行つたのであつた。

次ぎの朝レオニイは六時頃に眼を醒ました、もう労働者の群は街路を歩いて居た、がシャルルはまだ歸らなかつた。こんな舞踏會が長い等はないかと彼女は訝かしく思つた、そして別に心配はしないまでも、彼女の心は重くなつた、幾度となく彼女は戸を開けて若しや階段を上つて来る良人の足音が聴えはしないかと耳を澄ましてみた、然し何時まで経つても足音は聴えて來なかつた。間もなく彼女は一階で大きな聲で話をして居る人があるのに氣が附いた。シャルルの聲では無かつたが、良人以外にこんなに早く遣つて来る人のあるのを意外に感じたレオニイは足音を忍ばせて一階へ降りて行つた、彼女には内庭の諸音が良人の噂をしてゐる様に思はれてならなかつたのであつた、彼女は門番の部屋へ近附いた。

昨夜の騒動で一睡も仕なかつたティグル氏の家の給仕のブレイラルが、いち早く友人のベルトランの處へ遣つて來て、昨夜の出來事を話して居た。

「何だつて？」と此の家の門番が云つた「そんな事があつたのかい！——それは悪役ぢやあすまないよ！——結婚して立派な女房があり乍ら、那の女と結婚するなんて、——そいつが所謂「夫多妻」てえ奴だね！——当家の御主人に、手懸い目に逢はせてやんなさならちやあ不可ねえつて、みんなが云つて居たよ！」

「然し大した騒ぎだつたらうなあ！」

「と偉え騒ぎよ！——皆さんが騒り込んで居たが、娘のフロオルさんが一番酷い目に會つたよ！——娘さんはあの悪黨を——「多妻主義者」のモンジエランめを神様様の様に崇めてゐたんだからな——まるで夢中だつたんだからなあ！」

「まあ、モンジエラン——」とレオニイは傑然とし乍ら獨言つた、「まあ——モンジエランと云つたわ！」

「君ん處の舞踏會は散々だつたな？」

「最初はうまく行つたんだ——みんなが氣よく睡つてね——このモンジエランてえ奴は遅くやつて來たんだ。」

「時に俺の周旋した音楽家は何うしたね、満足したかね？」

「めあ！——あのヴァイオリン弾きかね？——まだ話さなかつたつて、あの男がモンジエランの相棒なんだ、お互に誰を知つてたんだ！」

「へえ——本當の話かい？」

「さうとも、奴等あ腹を組んで掛りやがつたんだ！——ラ・ヴァリユウルなんてえ名を附けやがつてね、モンジエラン

を叩き出す時に奴が加勢をしやがつたんだ、チエザアルさんの鼻をヴァイオリンで撲りやがつたんだ——それから大した騒ぎよ——二人共半殺しにして街へ抛り出したんさ！」

突然苦しい女の叫びが二人の話を妨げた、レオニイが門番の部屋の扉で正気を失つて倒れたのであつた。

「ああ、不可ねえ事をした！」と彼女に気が附いた門番のベルトランが叫んだ、「これはあの音楽家の細君さ——多分俺達の話の聞いたんだらうぜ！」

門番と門番の友人が彼女を助けに行かうと決心して立ち上つた時には、もうジャスティンが彼女を抱えてゐた、彼は瞬の奥さんが下へ降りて行つたのに気が附いて、それから間もなく下へ降りて来たのであつた。彼はレオニイを正氣附かせやうといろく手を盡して見た、がレオニイには彼の聲が聴こえなかつた、そして見る／＼うちに顔色が蒼白に變つて行つた。

「ベルトランさん、早く醫者を呼びに云つて来て下さい、早く——」とジャスティンが叫んだ、「急いで行つて来て下さい、私がこの方を部屋へお連れする間に——」

「然し、若しも——」

「君にお禮はしますよ、お醫者さんの方も私が引受けますから——私が總て保証します、さ、行つて来て下さい——」門番は急いで出て行つた、ジャスティンはレオニイを腕に抱へて五階の彼女の部屋へ行き、壁の上へそつと彼女の體を横たへた。彼女の容態は變らなかつた、ジャスティンは何うしてよいか解らなかつた。彼は泣き辱ら壁の隅

「置いて氷の様なレオニイの手を執り、それを自分の手で暖めやうとした。

「奥さん、死んではいけません！ 何時までも斯んな不幸ばかり續きはしますまいに——」

小さな聲がジャスティンを我に返らせた、フェリックスが眼を醒まして切りに何か飲み度がつてむづかるのであつた、その聲は眞赤になつて居て、短い、苦しうな呼吸をして居た。ジャスティンは何を興へてよいか解らなかつた。彼は母親と子供の間を行つたり來たり仕乍ら、戸を開けて砂糖を捜した、が何處にも砂糖は無かつた、火を燃さうとしたが燃える様なものは何處にも見當らなかつた。そのうちに門番が醫者を連れて遣つて來た。レオニイは放血を施されて漸く正氣附いた、が直ぐに恐ろしい譫妄に陥ちて良人の名を呼んだり、良人を殺したモンジエランを咒つたりした。醫者は譫妄から醒めるまで、誰か傍に居てやらなければならぬと云つた、ジャスティンは片時も彼女の傍を離れまいと答へた。醫者は次ぎにフェリックスを診察した、彼が處方を書いて居る間に、ジャスティンは自分の部屋へ行つて來た、そして醫者に一枚の金貨を渡してレオニイを是非助けて呉れと頼んだ。醫者は出来るだけ手を盡して見ると約束した、が彼は歸りしなにジャスティンの渡した金貨をソツと椅子の上に乗せて置いて出て行つた。醫者が屋根部屋を出るか出ないかにシャルルが入つて來た。彼は飲屋で一晩モンジエランと飲み明した揚句のつそりと屋根裏の彼の家へ戻つて來たのであつた、そのいつもより膨れぼつたい小さな眼で、鬼に角眞顔で無かつた事があり／＼と判つた。

彼は弓を手にして部屋の中へ入つて來た、そして壁の傍に坐つて居るジャスティンと、その脇で泣いてゐる口

オルを見て吃驚した様に立ち止まった。

「一體何うしたんですか？」彼はせき込み乍ら訊ねた、ジャステインは立ち上つて、彼をレオニイの傍へ連れて行つた。レオニイは眼を見張つて周囲をきよく眺め廻して居た。

「奥さんは貴方が死んだと思つて居らつしやるんですよ——殺されたと思つて居らつしやるんです——貴方は昨日からお歸りにならなかつたでせう——奥さんだけぢやありませんよ——小さなフェリツクスさんも悪いんです——」

シャルルは妻と子供を眺めた。彼の顔色はさつと變つた、彼は額に掌を當て乍ら呟いた。

「ああ、レオニイ——僕が知らんだな——何んて咒はしい呪だつたらう——さうだ——もう俺は駄目だ——ではさよなら、ロオルや、さよなら——」

「貴方は何處へ行かれるんですか？」

「運河へ身を投げるんです——それより外にもう路はありません——」

「自殺なさるんですか？——あゝ——それは勇氣のある人のする事ではありませんよ——貴方は子供を見棄てて行かれるのですか、出来るだけ幸福にしてあげるのが本當ではありませんか？——そんな事をなさつては不可ません——貴方が自殺なすつたら子供さん達は廻廻が食べられますか？」

「さうです貴方の仰有る通りです——僕けもう失敗に失敗を重ねましたが——もう一度やつて見ませう——然し何う

して妻はそんなに心配したんでせうか？——僕の早く歸れないのは解つてゐる筈なんですが——意外な騒動が起きましてね——然しそれは僕に無關係な事です——それから一寸モンジエランと附合つたんですが——これもそれ切りの事です——ただヴァイオリンを毀した事と、約束の金を貰へなかつた事が残念です——」

「その事なら御心配は要りませんよ——失禮ですが私が謝ればかり金を蓄へて居りますから、奥さんと坊つちやんのお醫者様の費用はみんな私が立替しますよ——いや、お返しになれる時返して頂きますか？」

「ジャステインさん、僕は何とお禮を云つてよいか分りません——僕は決して忘れません——何か——」

「そんな事は何うでも可いんです、然し奥さんが御全快になつてこの事に就いてお訊ねしたら、私が御用立てした事は仰有らないで下さい、貴方が御自分で働いて來られた事にして置いて下さいまし、さうすれば奥さんは一層嬉しくお思ひでせうし、私もそれで満足ですから。」

シャルルは彼の手を握り乍ら口籠もつた。

「本當に——こんなに親切にして下さるのは貴方だけです——」

263
醫者は二度目の診察に來た、フェリツクスの容態の悪化したのに氣が付いた、彼は出来るだけの手當を施したが、餘り望みがあるやうにも思はれなかつた。子供の容態の險惡なるを呑み込めぬシャルルは、その日の夕方に妻と子供の世話をロオルに云ひ付けて外へ出て行つた。それから二時間程経つてからフェリツクスは急に悪くなつた、ジャステインは急いで藥屋や醫者附けた、折悪しくその店の主人は留守で、店員は處方が無ければ調劑が出來なかつた。仕方

なしに彼は外の薬屋へ行つて瀉くの事で主人を説き伏せて薬を作らせた、がこんな事で時間か擧つてしまった。ジャスティンは家の入口でシャルルと一緒に立つた、二人は全速力で五階へ駆け上つた、部屋へ入らうとする時ロオルが遣つて来て叫んだ。

「静かに！ お母さんは些つとも動かないのよ。坊やは眠つて終つたのよ。」

シオルはフェリツスの寢臺へ走せ寄つた、赤ん坊はもう冷たくなつて居た。小さな弟の死んだ事を知つたロオルは激しく泣き出した、ジャスティンはロオルを抱いて云つた。

「ロオルちゃん、お母さまが御病氣でせう、だから悲しいのを我慢するんですよ、お母さんの御病氣が快くなつてからも、坊やの死んだ事をお聞かせしては不可ないんですよ、若しお聞かせするとお母さんも死んぢまひますからね。シャルルさん、此方へいらつしやい——もう悲しんでも仕方がありません——貴方に獲られて居る奥さんの傍へいらつしやいませ、せめてこの方のお生命丈けでも取り止める様に骨を折つて見ませう——そして出来るだけ早く坊やの遺骸の仕末をませう——お見せしない様に。」

悲しみに打ち碎かれてシャルルは一言も云はないでジャスティンの云ふなりになつた。彼は自分の寢臺へ坐つて兩手で顔を覆つてゐた。ジャスティンはロオルに叫んだ。

「ロオルちゃん、あんたお父さまの處へ行つて挨拶しておあげなさい——お父さんの傍を離れては不可ませんよ——まだあなたが獲つてゐることをお父さんに知らせておあげなさい。」

離れなロオルにいろいろの注意を與へてから、ジャスティンはフェリツスの死骸を片附けた。レオニイの熱症は醫者を満足させた、彼はこの熱症から眼醒めたら病人は正氣附くだらうと云つた。

「然しレオニイがフェリツオスの事を訊ねたら、何んと答へたものかしら？」とシャルルが云つた。

「お醫者様がフェリツオスさんの容態がはしくないので、田舎の空気を吸はせたら良いだらうと仰つた事にしては何うでせう、——私の叔母がガグネエに居ますから其處へ預けた事に仕ませう、如何ですか？」

「さうませう、——ま、當分の間妻にはこの事を知らせずまい。」

それから八時間後にレオニイは正氣に返つた。彼女は氣遣はしさに周囲を見廻したが、良人とロオルの姿に氣が附いた。彼女は微笑を浮かべながら腕を伸ばした、二人は駆け寄つて彼女を抱擁した。

「あゝ！ 妾ずい分長い事病氣でしたのね？」とレオニイは弱々しい聲で叫んだ。「シャルル——妾貴方は殺された事と思ひましたのよ——夢でせうか？ 兎に角門番が話を誇大に云つたんですわね——」

「そんな噂はあつたがね——然し何んでもないさ——僕はこの通り無事さ——」

「ロオルちゃん、あんたも居たの——ああ！ ジャスティンさんも！」

「あゝ、ジャスティンさんはお前が病氣になつてからずつと夜も眠らないで看病して下さつたんだよ——」

「まあほんに御親切な——なんと申し上げてよいやら——あのフェリ坊は何うしましたの——子供は？ 妾なんだか物足りない様に思ひましたわ——」

「レオニイや、」とシャルルは強て平氣を變ひ答へた。「お前も同意して呉れると思ふがね。フェリ坊は餘りよくないんだ、お医者さんが田舎へ暫くやつたら良からうと仰有るので、ガダネエのジャスティンさんの叔母さんの處へお預けしたよ——だから——」

「まあ——フェリ坊を連れてお行きになりましたの——」彼女は悲しさに叫んだ、三人は代る／＼彼女を慰めた。レオニイは快くなるに従つて、何うしていろ／＼の費用を拂つたり、必要なものを買つたりしたかを非常に心配し始めた。彼女は良人に向つて、あの夜ヴァイオリンを弾いて金を貰つて来たか何うかと訊ねて見た。

「あゝ、貰つて来たよ、お前の病氣の間三つ四つあんな仕事があつてね、ジャスティンさんにお前の看病を御馳みして置いて行つて来たんだ。」

「もうモンジエランとは御一緒ぢやないでせうね？」

「心配する事はないさ、僕は段々有名になつて行くよ、——多分近いうちにオオケストラの指揮者になるだらうと思つてるよ。」

彼女はシャルルの言ふことを全く信じた、そして彼が立派な才能で一家を養つてゆくのを見て心から喜んだ。勿論シャルルは仕事の口を見付けやうとしていろ／＼骨を折つて見た、があのティグル氏の舞踏會の晩の一件があつてからは、誰一人彼を雇はうとは仕なかつた、それに社交界と云ふ様なものから全然遠ざかつてゐる彼に、誰から紹介状を買ふことが出来やう？

二二 オオケストラ

モンジエランはティグル氏の賄布で買った立派な黒い上衣を買ひ、新しい帽子を脱いで烏打帽を被つた、約禮舞踏會に着て行つたもので残つて居るのは體にピッタリと合つた黒いズボン一つであつた、このズボンを穿いて、上に古びた襪履を着込んだ格好は極めて變なものであつた、が彼の如何にも襪履持ちらしい、變のつ面に畏れを露して誰一人そんな氣振を見せるものはなかつた。彼は膝すフロオルも無ければ、一緒に散歩するテミイルも無く、バラ撒く友人の金もないので、非常に襪履が悪かつた。シャルルはシャルルで新聞を讀むか、ストオヴに當るかする以外にはカフェエへ足踏みをしなくなつたのですつかり退屈して終つた、自分に不満を感じ、これまでの所業や、現在の怠惰な生活に愛想を盡かし、これから先何うしやうと云ふ氣力も失つてしまつた。

或る朝の事であつた、モンジエランはいつもの通り快活な顔をしてシャルルの處へ遣つて来た、彼は片手を背中へ廻して反り身になり、如何にも得意な顔をしてゐた、シャルルはモンジエランの顔を見て云つた、

「何事が起つたね？」

「おい、僕等は遂に成功したぞ——奴等をアツと云はせてやるよ！」

「何んだつて！——僕等二人が？」

「さうよ！ 僕は更に一陣地を抜いたんだ——僕は仕事に掛つたら必ずそいつを押し切るよ！」

「處でその仕事と云ふのはなんだね？」

「それは——オオケストラだ——」

「へえ——オペラでやるのかね？」

「さう手取り早くは行かんさ——僕等はまづクウルティユ——ベルヴィイユ——デュウザアミイ・サルウルと云ふやうな場所まで才能を示さなければならん——」

「然し——君は音楽をやるかね？」

「そんな事は君の知つた事ぢやあないさ——安心して可なり——僕の手腕に信頼せよだ。」

「踊り場であるのかね？」

「さうさ——それが何うしたんだ？——ちやんと金を握ひさへすりやあ何處だらうが構はんさ——何うだ、其處まで行かう、この事でもよく相談しやうぢやあないか、牡蠣が待つてるんだ——この仕事を持ち込んで来た愉快な男に君を紹介しやう。」シャルルは彼と一緒に小さな酒場へ入つた。そして食器や牡蠣の並べてある小部屋へ入つた、其處には汚い、可成年代の纏つた外套に包まつた老人が酒臭い息を出き乍ら腰を下して居た。

「デュウアンの爺さん、」モンジエランは部屋へ入るなり云つた、「お前僕に僕の親友シャルル君を紹介するぞ、舞臺音楽のヴァイオリンの名手だ！」

老人は帽子を脱いで前の卓へ向つて、恭しく會話した。

「なにをやつてるんだい？」

「なに氣にする事はないさ、老人は盲目なんだ、その爲めにクラリオネットでティロレゼの様な名人になれなかつたんださうだ——さあ、デュウアン爺さん、食卓の方へ出掛けたり、牡蠣が待つてるよ！」

「結構でげすな！」と老人は答へ乍ら、皿を積み重ねた上に腰を下さうとした。モンジエランは彼の手を引いて坐らせてやつたが、いざ食べるとなるとこの老樂師は食事に視覚が不要であることを立派に證明した、彼は始終卓の上を搜つてゐて、皿の上に何も無くすると今度は遠慮なく隣の人に皿へ指を突込んだ。

「シャルル君、このデュウアン爺はクウルティユの腕つこきの樂師の一人だ、五十五年樂師をやつて居るんだ——何うだ、老クラリオネット、さうだなあ？」

「其通りで御坐んす！ 俺は十歳の時からクラリオネットを離した事がありませんわい——酒杯は何處ですか？」

「此處だ——それ、解つたかい？——爺さんの健康を祝す！ デュウアン爺さんは盲目になつたが、腕にやあ變りはないんだ！」

「さやうですわい、それに盲目になりやしたら耳がその分だけ達者になりやしてな——」

「この「グラン・サン・マルチン」から「イル・ダムウル」まで、踊り場と云ふ踊り場のお客は御一統から厚く御品買お引立に罷かりましたるデュウアン老人今回格別のお引立に依り、「デュウ・ザアミイ」よりオオケストラ立役として

出動な仕りまする次第——」

「その通りでげすよ——はい。——ええ、もう牡蠣は御坐いませんかな？」

「もうないよ——おい、クラリオネツトの爺さん、——酢漬の小胡瓜を付け合せたカツレツがあるが、何うだい？」

「へい、結構で！」

「さて其處でだ、シャルル君、僕は一日ユウルティユからの歸りに偶然この尊厳す可きデュウアン老人と一緒にたんだ、そして僕は君の天才ヴァイオリニストであることや「トフ、ラ、ラ」をワルツに直した恐る可き天才的才能について老人に大いに話したんだ、老人は君と是非知り合ひになり、出来るならば君をオーケストラに雇ひ入れたいと云ふんだ、然し僕は君は指揮者でなくては承諾はすまいと云つたんだ、其處で老人は今日デュウ・ザアミイ音楽隊の指揮杖を君に渡して、自らオーケストラの一員にならうと云ふんだ、何うだい、老クラリオネツト君？」

「その通りでげすよ！」

「おつとデュウアン爺さん、氣を附けたり、君は指を皿の中へ突つ込むよ！」

「俺は麴麵を捜しとりまするがな、」

「君はもう食つたんだよ——よし、僕の分をやらう——いや、クラリオネツトてえ奴は威嚇がいいな！」

「さて、若い衆や——立派なオーケストラを作るにや四人の人間が必要ですわい！」

「よし、四人だ！」

「まづ第一ヴァイオリン 一人で澤山だかね——」

「そいつあシャルルだ！」

「クラリオネツト——」

「そいつは爺さんだ！」

「コレトラ・バスだ——」

「そいつは俺が見付けて来る、コンサヴァトゥルから出た奴を知つてるから——」

「最後に太鼓。」

「よし、そいつは俺の役だ——まあ腕前を見て呉れ給へ——奴等は太鼓の音と思ふだらうよ！」

「では定まりましたな——」

「それから六フラン宛、何うだい？」

「さうですよ、二十スウだけ指揮者が餘計に貰ふんですな。」

「結構だ！ 處で樂器は其處にあるんだらうな、大太鼓なんざあ僕の下宿にはないからな——成る程な、酒場にコントラバスに太鼓が置いてあるのか、素敵だ！ シャルルはヴァイオリンを持つて行くが——こいつが又名作でね！」

「處で朝のうちに練習をして見ますかな？」

「戯談云つちや不可ん、われ／＼の様な藝術家は練習なんざあ決してやらんよ、何あに殺するより産むが易しと——」

「なる程——何にか喰べるものはありませんかな？」

「おい、デュウア爺さん、君はまるで飽きたいな奴だなあ——もう何んにも無いよー」

「さやかかな——ではクルディユへ戻りますか——今晩七時に——デュウア爺さんで會ふ事だ。」

「よし——では確に引受けたから、安心するがよいよー」

老人は犬を引つ張つて去つた。モンジエランは謝定をすましてシャルルと一緒に出た。彼は歩きながらシャルルに云つた。

「何うだい、文句は無からうな？」

「うん——だが舞踏場で弾くのは——」

「下らん事を云ふね——腕は場所によつて違ひはせんよ——今日千兩役者なんて云はれてる奴等も小屋から呟き上げかんであらね——それに僕等は金が欲しいんだから——兎に角十四フランの金を二人で分けるんだ——」

「では君、コントラバスをやる男が雇へんぢやあないか？」

「だから君はお人好しだと云ふんだ——コントラバスに七フラン拂ふもんかい——十スウもやればいいさ、充分だよ。」

「へえ——さうかなあ——」

「君の家の前に靴磨きの小僧が居るだらう——あいつで澤山さ——やあ、其處に居た——おい、小僧——一寸来い——靴磨き小僧が走つて来た。」

「貴様は俺に雇はれんか？」

「へい、結構だ。」

「貴様は夜分は仕事がないだらう、靴磨きはやらんのだらう——何うだ、今晩十スウやるから俺の處へ来い、但し食事付きだぞ——」

「結構だ。」

「但し七時から夜中までだぞ。」

「へい——一體何を致しますんぞ？」

「なに、樂な仕事だ、心配する事はない。五時半までに仕度をして、此の紳士と一緒に来るんだ。解つたか？」

「へい、畏まりました。」

「ではシャルル君、失敬するよ、いつもの處で會はう——忘れないでコントラバスを引つ張つて来て呉れ給へ——」
モンジエランと別れてシャルルは自分の住居へ歸つた。彼はすつかり上機嫌で、揉み掌をし乍ら部屋へ入つて行つた。そして直ぐにモンジエランの買つて呉れた安ヴァイオリンを持ち出して弾き始めた。

レオニイは床から起きて居た。彼女は三日程前から少し疴起きて居られるやうになつた、がまだストオツの前の處まで歩いて行くのが漸くであつた。彼女は病氣の爲めに仕事の出来ないのをひどく苦にして居た、そして氣力が恢復した時にやる仕事をあれこれといつも考へ込んで来た。レオニイは娘を抱いたり、接吻したりして小さながら、フ

エリックスの事を喋つてばかりゐた、彼女は可愛いフェリ坊がガグネエの清々しい空気を吸つてゐると感じているのである。レオニイはシャルルの噂々しい話に気が付いた、そして彼がヴァイオリンを取り上げたのを見て云つた。

「貴方又お仕事の口が貝附かりまして？」

「ああ、貝附かつたよ。」

「まあ、本當に有難いことですねえ」

「今晚僕はオーケストラの指揮をするんだよ。」

「何處でおやんさいますの？——社交界ですよ？」

「いや——公開の席だ——」

「誰と御一緒ですか？」

「お前の知らん人物さ。彼は狼狽へた、レオニイは直ぐにそれを看破した、そして彼に質問するのを止めて終つた、彼が近くへ来た時に云つた。

「貴方お食事をなすつたのですのね？」

「ああ、何うして？」

「何方と？」

「何方？——とそんな事何うでもいふぢやあ無いか？——招待されたら断れんよ。」

「貴方、貴方は一家の主人でいらつしやいますわ、——が決してお會ひにならぬ等の方が御坐いますわー」

「いいさ——ま、黙つてゐて呉れ——兎に角僕は今晚はオーケストラの指揮者さ。——萬事うまく行くから見えてお呉れ。」

彼女は口を噤んだ、シャルルは舞踏曲の練習に掛つた、五時半になると彼け仕度を始め、ヴァイオリンを掲へて出て行かうとするシャルルを呼び止めてレオニイが云つた。

「あら、新しいシャツも召さないし、ブラシもお掛けにならないで？」

「これで結構さ、ぢや行つて来るよ！——遅くなると思ふから、遠慮なく先きへ歸てお呉れ——體を大事にしてね。」

シャルルは家を出た、建物の出口で彼は靴磨きの少年を呼んだ、少年は彼の後に従つた、二人は間もなくモンジエランと落ち合つた。

「やあ、来たね！——あの老若クアラリオネットと一緒に舞氣よく遣つ附けやうぢやあないか！」

「然し僕は君の様に平氣ぢやあ居られんね——この少年はコントラバスの弾きやうを知つてゐるのかい？」

「コントラバスなんざあ絃を引でこすればいいんだ——何の絃だつて構やせんよ——第一舞踏する奴がそいつを聞き分ける耳を持つてると思ふかい——それに僕が力任せに太鼓を叩くから、君達が少し位間違へたつて分りやしないよ——ドン、ドン——力一杯叩くからね！——さあ行かう——おい、小僧後から来い！」

クウルティエの入口には老若クアラリオネットのデュウアンが立つてゐた。

「おい、老クラリオネット君、来たよ、一つ我々を紹介して呉れ給へ。」

「いや、これは——さあ入りませう——三人お呼びですか？ あのコントラバスの方はいらつしやつたかな？」

「来たとも——ちやんと面が三つ揃つてるよ。」

老デユウアンが廣間の方へ行く階段を上りかけると、支配人が事務室から叫んだ。

「おい、デユウアンの爺さん、君はオオケストラ連中を連れて来たかい？——ああ、さうかい——おや、子供がゐるやうだな？」

「この少年は天才ですよ！」とモンジエランは支配人に向つて高飛車に出た。「多分僕等の様な藝術家を平生お頼みにはならん事と思ひますがね！」

「さやうで、なに俺はそんな事を氣にしては居りませんよ」モンジエラン得意の一手は確に効を奏した。「さあ、樂隊席へ上つて直ぐ始めて下さい、もう離り手が十分居ますからな！」

藝術家達は舞臺へ入つた。眞中にあるオオケストラ席は十人は僅に入れる大きなもので、後方に椅子が置いてゐた。老デユウアンは猿の癖につる／＼と椅子を登つた、モンジエランとシャルルがその後を續き、小僧が殿を務めた。上にはコントラバスと太鼓が置いてあつた。モンジエランは樂隊席を歩き廻り叫んだ、「此處で見世物になる譯かな。」

「そんなもんでさあね！」老デユウアンはポケットからクラリオネットを取り出した。「今支配人が何か云ひまへ

な？——コントラバスは小供つぽいで方すかい？」

「なる程——少し離れるとさう見えるかも知れんね、背が低いからな。さあ調子を合せるよ！」

老デユウアンがシャルルに「ラ」を吹いてやつてる間に、モンジエランは靴磨き小僧をコントラバスの前に坐らせて云つた。

「これを見ろ、貴様がこれを弾くんだ、——弓で絃をこすればいいんだ、何れでも撥はん——がだ、三本あるから、綺麗な音を出すために一本宛鳴らして呉れ、一本鳴らしたら、今度は別の奴——いいか、解つたか？」

「へい、へい。」

「俺が貴様を睨み附けたら二本でも三本でもいいから、力一杯に撥むんだぞ！」

「へい、承知しました。」

「一寸鳴らして見せろ！」

靴磨き小僧は絃の上を弓で擦つたが彼は弓の木の方で絃を擦つたのでコントラバスは奇妙な音を出して唸つた。餘り神經の繊細ならぬデユウザアミイの常連も思はず叫んだ、

「チエッ！——なんてえ變な音を出しやがるんだい！」

モンジエランは彼を睨つて、その弓を正しく持ち直させやら云つた。「おい、困るぢやあ無いか、氣を付けろ！——阿呆め！」

小僧は蹴られた處を撫で乍ら膝を盛めた、デュウアンがバスの方へやつて来て云つた、
「何うしましたい？」

「何でも無いよ、おいクラリオネット、コントラバスの調子を纏む。」

「よし来た——さあ「ラ」を纏みますぜ！」

モンジエランは小僧を睨んで、弾けと合圖をした、偶然彼はうまく「ラ」に近い音を出した。

「少し高いやうでげすな、」と老樂師が云つた。小僧は答へた。

「へい、ぢやあ床の上へ坐りませうか。」

「え？ 坐る？——何だつて？」

「デウアン爺さん、さあ始めやう——一體何時まで調子を合はせてゐるんだい——下の連中は我慢し切れなくなつてゐるんだ。事實踊り手は各仕度を終つてオオケストラの始まるのを待つてゐた。老デュウアンはポケットから一枚の譜を取り出してシャルルに渡した。

「これをやつては如何ですか？——最初のカドリイルにな？」

「僕には弾けませんよ、第一僕に讀めませんや——そんなものを覚えるには一週間は掛りますね、僕に知つてゐるものをやりますよ。」

「何んですつて？——真逆にしたさんな、貴方が何を弾くか解らなくて俺が吹けますか？——それに、偉いヴァイ

オリンだと云ふのに譜が讀めないとは？——それと知つたら！」

「おい、クラリオネットの爺さん、下らん事を云つてないで始めやうぜ！」とモンジエランは無理に彼を座らせた。「第一ヴァイオリンに先づ弾かせるさ、知つてたら君もやる、知らなけりややらん、それで結構ぢやあないかね——然しさう咆えなさんなよ、まるで太鼓みたいぢやあないか！」

デュウアン老人は吐き乍らクラリオネットの笛口を唇に當てた、シャルルは「知つてゐるもの」を弾き出し、モンジエランは力任せに太鼓を叩いた、靴磨き小僧は絃を力一杯に纏み、恐ろしさうな調子をしてモンジエランの調子を讀めてゐた、幸にして老デュウアンはシャルルの弾き出した曲を知つて居たので、直に機織を直して後について吹き始めた、彼はモンジエランの太鼓に對抗するつもりか力一杯にクラリオネットを鳴らした、従つてカドリイルは破綻も生じないで首尾よく終つたが、勝手は時々叫んだ。

「おい太鼓！ 少し靜かに纏む！」が自分の叩く太鼓の音に夢中になり、その音で纏になつてゐるモンジエランは一向平氣であつた。

「何うだね、デュウアン爺さん、こんなもんだよ！」とモンジエランが云つた。

「あの曲なら俺も知つとるでな——がバスが何うも——」

「結構かね？ 然し僕に聞かす北山だ、奴等あ樂隊に何か出さんのかな？」

「ああ——樂師は一晩一晩てえ事になつて居りますわい。」

「みんなで一本かね？ 畜生め！——おい給仕君、杯を四つに酒を四本割む！」
給仕は驚いて彼を讀め乍ら答へた。

「四本ですか？——樂隊にそんなに出した事はありませんが。」

「おい、俺の云つた通りに持つて来い、べら癖め！ 愚圖々々吐かすな、早く持つて来い。」
給仕は呆れ返つて支配人に相談した。

「いいさ、持つて行つてやれ、餘分の酒は差引くから構はんさ。」

モンジエランは酒を引つ掛け、外の道中にも飲ませた、間もなく支配人は廣間へやつて来て樂師に向つて叫んだ。
「さあ、やつて呉れ！——君達は飲んでゐて少しも弾いて呉れないぢやあ無いか？」

モンジエランは支配人の顔を見て笑ひ乍ら太鼓をドンと鳴らした。これが音樂隊の始まる合圖であつた。
「今度は？」と老樂師が訊ねた。

「同じ物よ！ あれで結構だ、二度でも三度でもいいさ！」

「いいね！ ヴァリエーションで行くよ！」と少しい氣持になつたシャルルが叫んだ。

同じ曲が繰返された、飲まぬ酒を飲まされてすつかり酔つた靴磨き小僧は、生れて始めて持つて来た小器用に使つて、時々大きな音を出してはモンジエランの賞讃を博した。カドリイルが終ると支配人がやつて来て云つた。
「何うも大太鼓が騒々しくて困るつて苦情が出たんだ——外の樂隊の音が聞えないんださうだ。」

「愚圖愚圖抜かすなあ、一體何奴ですかい！」とモンジエランは酒杯を手にしたまま樂隊席から半身を乗り出して怒鳴りつけた。「脚の心配でもしろ、僕等の事は做つとて呉れと傳へて呉れ給へ！——畜生め、思ひ切り太鼓を鳴らしてやるぞ！」

「貴方がたの御隨意に願ひます——立派な音樂家で居らつしやるんだから！」と支配人はモンジエランに敬意を表した、が彼の言ひ分にムツとした支配人は老クラリオネットの取に囁いた。「おい、デュウアン爺さん、もつと穩しい道中を引つ張つて、て呉れなくちやあ困るね——俺の言ふ事を些つとも聽かんぢやあないか？」
酒が廻つてすつかりいゝ體感になつたデュウアン老人は魂を振り乍ら答へた。

「いやこの道中はいい人達でさあ——技術もたしかだし、それに今朝からこの老人を深切にして呉れやしたでな、小言を仰る御家様の方が間違つとりませうわい——」

「樂隊！ 早く始めろ！」とこの鬧場は常連らしい、小男が横柄に叫んだ。「あの樂師めらあ、酒を飲んでばかり居やがつて、音樂はそつちのけだ！」

「樂師の事を其處でかれこれ云つてる奴は何奴だ！」とモンジエランは大鼓を跨ぎ乍ら怒鳴つた。「文句があるんなら言つて貰はうぢやあないか、撲られ度いんなら何時でも遣つて来い！」

勝手も飲手も吃驚仰天してモンジエランを讀めた、彼の下流な態度に憤つた常連中の血氣の道中は、樂隊席からあの生意氣な野郎を放り出して了へといきり立つた、騒ぎを聞き附けた老クラリオネットは靴磨き小僧を捉へて云

つた。「ねえ貴方、餘り大きな音を出しなさんな——踊り手を怒らせるなあつまらんからね。」

「旦那、私ちやありませんぜ！」

「一體こりやあ誰だい？」と老人は床を踏み鳴らし乍ら叫んだ。「樂師でねえ人間かオオケストラ席の中へ這入つてやがる！」

支那人は大汗になつて踊り手に向つて「騒る」とか「叩く」とか云つたのは御客儀の事ではなくて太鼓の事だと解した。一同はこの釋明に依つて静まつた、支那人はさかさずシャルルに云つた。

「第一ヴァイオリン、早く始めて呉れ！」

シャルルは形勢不慮と見て取つてデュウアンに囁いた。「同じ物で行かう！」

態、カドリイルが始まつた、モンジエランは跨いだ太鼓をやけに引叩いたが二度目が終るか終らぬかに五六人の踊り手が叫んだ。「何うしたんだ！いつも同じ曲ぢやないか——馬鹿にしてやがる——別の奴をやつて呉れ、もつと早いのを——新しい奴をやれ！」

シャルルは弾止めて老デュウアンの方を振り返つた、彼はクラリオネットの笛口を夢中で捜し廻つてゐた——その笛口は休憩中に靴磨き小僧がソツと抜いて置いたのであつた。

「おい君、トラ、トラ、ラ、ラ」をやれ！」とモンジエランが叫んだ。

「よし、——君はいいかね？」

「なあに、君について行くさ——處でデュウアン老は何うだ？」

「俺は笛口を失つてな——幾ら捜しても無いんでな。」と彼は答へ乍ら床の上を夢中で捜り廻してゐた。シャルルはカドリイルを弾き出した、それについてモンジエランは太鼓を叩いた、小コントラバスは酔つ張らつて弓を動かす事も覺束なかつた、老デュウアンは笛口を見付けて漸くの事で吹き始めたが、曲を知らないで調子外れな音を出した。

シャルルはデュウアンを喚びつけた。「まるで調子外れぢやあないか、止めて居て呉れ給へ！」デュウアン爺さんは調子外れなクラリオネットを何うしても止めなかつた、シャルルは我慢し切れなくなつて弓を止めた、とデュウアンもクラリオネットを口から離した、コントラバスの弾き手はぐつすり眠込んでゐるし、鳴つてゐる樂器はモンジエランの太鼓だけであつた、太鼓の獨奏では踊れないので一同は樂隊席の方へ向いてがや／＼と怒鳴り始めた、威勢のいい肉屋の若者がモンジエランに向つて叫んだ。

「な——んだ！——擲りでいい氣になつて太鼓をドンドン叩いてやがる——やい、ヴァイオリンの野郎、手前は眠てるのか、——早く何とかしねえかい——」

「僕は太鼓を叩くのが役さ——なんと云つたつて止めんぞ！」と怒鳴り返して置いて、モンジエランは太鼓の胴をド／＼と叩き始め、一同は益々怒り立ち、拳を振りあげてモンジエランを罵した。「太鼓を止めさせろ！あの無禮極まる野郎を叩き出せ——樂隊を降ろせ！奴等あ役に立たねえぢやあねえかい！」

シャルルはいち早くヴァイオリンを小脇に抱へ込んだ、老デュウアンは手探りで椅子敷の方へ騒り寄り、この騒ぎ

に眼を醒ましたコントラバスは、こそくとコントラバスの後へ隠れた。がモンジエランは躍りて悠々と太鼓を叩き乍ら鼻唄を歌つてゐた。「さあさ、踊りは始まりぢや！」

青くなつて駆けつけた支配人はモンジエランに向つて叫んだ。「おい！ 太鼓を止めろ——もう降りて来い！」

「太鼓を止めろ？ ふん！ 止めてやらう——だが僕は外の奴にやあこの太鼓は打たせんぞ！」と云ふが早いかモンジエランは足を擧げて靴の踵で太鼓を蹴破り更に裏の皮も蹴破つた。このモンジエランの行爲に憤激した支配人始め騎手一同は鬨の聲を作つて樂隊席目掛けて突進して、或る者は正面から、或る者は裏の小櫛子から強襲を開始した。モンジエランは大童になつて、太鼓の残骸を振替代りに振り廻し、遣ひ上らうとする連中を片づ端から叩き倒し蹴下し乍らシャルルに向つて叫んだ。「おい、そつちを守つて呉れ！ コントラバスとデュウアン老人で防禦を作つて呉れ給へ！」

シャルルは必死になつて櫛子既を防禦した、が正面で撃退された連中が背面へ殺到したので遂にコントラバスの筐は破られてしまつた。モンジエランはデュウアン老人を捕まへて櫛子の代りにした。「さ、デュウアン爺さん、吾輩の彈丸除けになつて呉れ！」老人は文字通り盲目滅法に腕を振り廻しながら非鳴を擧げた——遂に郡衆は樂隊席を占領して、モンジエランとシャルルを捕まへてしまつた——一人コントラバスの小僧はオオケストラ席の側面を傳つていち早く逃げ出してしまつた。

そのうちに酒屋の手代が呼んだ武裝警官の一隊が騒擾者を逮捕しにやつて来た。モンジエランとシャルルは直に捕

縛されてしまつた、彼等が引立てられて行く間に、靴履小僧は人混みを押し分けて首尾よく街路へ飛び出すことが出来た。

二二二 致命の打撃

未だ九時になつたばかりであつた、レオニイは寢床へ入つたが眠れなかつた。小さなロオルも、ジャステインが來て居るので眠たがらなかつた、彼はロオルを膝の上のせて面白のお話を聞かせてやつて居た。

「御母さま、」とロオルが云つた。「まだ私眠くないのよ——ジャステインさん、もう一つお話して頂戴な！」ジャステインがお話を始めやうとすると、誰か戸を叩く者があつた。

「あら！ 何方かいらつしやいましたのね、」とレオニイは不安を覺へ乍ら云つた。「おの主人ではないと思ひますわ！

——それに鍵か此處にありますもの、ジャステインさん、恐れ入りますが、一寸出て下さいました。」

ジャステインは立ち上つて戸を開けた。戸口には靴履きの小僧が立つてゐた。

「小供ですよ、」とジャステインが云つた。

「ああ！ この人はいつも此の御家の入口に居るわ！」とロオルが叫んだ。

「どうですね、私も知つてますよ、」とジャステインが云つた。「君、何か用があるのかね？」

「私は十スウ貰はうと思つて来たんです。」と少年は答へた。

「君の十スウ？ 何んの事だね？——その謬を云つて見給へ！」

レオニイは少年に中へ入るやうにと云つた、少年は云はれるまゝに中へ入つた。

「誰が御前さんに十スウ拂ふの？」

「奥様、御宅の御主人です——門番がシャルルさんの御住居は此處だと教へて呉れましたんで——」

「シャルルは妾の良人ですが、若し主人がお前さんにお借りがあるなら拂つて上げますよ——ですけれど何うしてこんなに遅くになつてお金を貰ひに来たの？」

「私は今歸つて来た處なんです——もう一人の旦那がお宅の御主人と一緒に私を連れて行つたんです！」

「主人がお前さんを連れて行つたんですつて？」

「さやうで、私は十スウの約束で御件したんでさあ——バステえものを鳴らしたんです、だがみんなが睡る代りに鳴かしやがつたんで、私は逃げて来ましたんで！」

「まあ、ジャステインさん、何うしたと云ふんでせうか！」

「まあさう昂奮なさらんで、此の子は何を云つてるのか解らないんですよ。」

「そんなことはない——私は見て来たんだ！」

「一體お前さんは何處から来たの？ 何處で主人と別れたの？」

靴磨の少年は今晚の出来事を詳しく物語つた、レオニイは非常に心配した。

「お前さんと別れた時、主人は何うしてゐましたの？——さあ、早く返事をして！」

「奥さん、私が逃げ出す時には兵隊が来て御主人を縛つて行きましたよ！」

「縛られた——シャルルが——ああ、何うしたらいいでせう！」レオニイは正氣を失つた様に枕の上に突伏した、ロオルは母親の腕を握り、寢臺の上へ這上がつてその耳許で叫んだ。

「御母さま、御母さま——そんなに悲しがらないでよう！」

レオニイは僅に残つた氣力を振り起してジャステインに云つた。

「二生の御躰ひです！ 何うぞその子と一緒に、——その子と一緒に宅の居る處へ行つて、何をしたか御訊ねになつて——救つて貰つて下さい——何うぞ一刻も早く！ 御躰ひです！」

ジャステインは直ぐ少年を連れて出て行つた、レオニイはロオルと二人きりになつた、彼女はロオルを抱きしめながら繰返した。

「ああ、可哀さうなロオルさん！ お前のお父さまは捕縛されたんですつて——もう躰みの綱が断れたんです！——妾にはもうこれに打ち搥つ氣力が無いのよ！」

小さなロオルは母親を慰めやうとしたがレオニイの弱り切つた精神はこの新しい出来事で全く打ち碎かれ、全ての希望、全ての勇氣が失はれてしまつた、そして一刻毎に彼女の體は昂まつて行つた。

十一時が鳴つた。ジャステインはまだ歸つて来なかつた、レオニイは口も利かないで耳を澄まし乍ら待つてゐた。彼女の耳にはロオルの可憐な慰めの言葉も入らなかつた、ロオルは眠いのを我慢し乍ら母親を一生懸命に慰めてゐた。苦しい、怖ろしい半時間が更過ぎた、——と誰か忙しく階段を駆け上つて来る音がした——やがて扉が開いた——入つて来たのはジャステイン一人であつた——レオニイは低い呻きを洩らして再び枕へ顔を俯せてしまつた。「大丈夫です！」とジャステインは彼女の寢臺へ近付き乍ら叫んだ、「御主人はもう大丈夫です、私は會つて話をして来ました——明朝は御歸りですよ！ さ、元氣を出して！」

「本當で御坐いますの？」

「本當ですとも！ 私は御主人の毀した物を償還する事にして酒場の番頭と話を附けて来ました——明朝は主人は放免されるさうですよ。」

「まあ、それは本當でせうか、ジャステインさん？」

「私は喜びますよ！」

ロオルはジャステインに抱かれて寢床へ入つた、ロオルを寝かせてからジャステインは苦しうなレオニイの顔を見て云つた、

「何うですか、御氣分は？」

「あたし苦しうて——胸も——心臓も——何處も彼處も疼びんですの——でも——間もなく癒ると思ひますわ。」

「まだ御苦しうですね——奥さん、私に御願ひがあるのですけれど」

「御願ひ——このあたたくしに——まあ！ 何がこのあたたくしに出来ませうか？」

「私は、御病氣で何方も御世話をする方のゐない貴女を放つて置いて、眠る事は出来ません——何うぞ、今晚は傍で看病してさし上げる事を御許し下さいませんか？」

彼女は暫くの間沈黙して居た、やがてレオニイはなんとなく暖かな調子の籠もつた聲で叫びた。

「ええ——今晚は——傍にゐらして下さいまし。」

彼女は全く打ち砕かれてしまつた様であつた。明方の三時頃になつて、部屋の中の死の様な静けさを破つて、低い微な呻き聲がジャステインの耳に聴こえた、ジャステインはレオニイの枕許へ近寄つて云つた、「何うなさいました？」

「大變——苦しいのですの——と若い妻は微な聲で答へた、「今晚のいやな出来事のためにあたたくしはもう打ち砕かれて終ひました——もう駄目です。」

「ああ！ 御苦しうのですか——では直ぐ醫者を呼んで來ませう？——直ぐに——」

「いえ、いらつしやらないで下さい——もう間に合ひますまい、あたたくしの近くに居らして下さいまし——息のありますうちに——御話したい事がありますから——」

「いえ、そんな事があるものですか！ 氣を確にして下さい——そんな事があるものですか、奥さん、確りして下さいまし——」

「ジャステインさん、御醫者様はもういらした處で無益です——何んな御深切ももう——あたくし死期が——死の聲音が近附いて来るやうに——思ひますの。」

「奥様！ 確りりして下さい——貴女をお助けします——何うでもして御助けします——確りりして下さい——お弱りになつたんですよ——そんな事があるものですか——」

彼は狂人の様に部屋の中を駆け廻つた、そして藥瓶の中を覗き込んだり、いつも彼女の坐る場所へ行つたりした事句、彼は又寢床の傍へ戻つて来て、床の上に膝をつき、レオニイの掌を執つてそれを涙で濡らした。

「ああ！ ジャステインさん！ 貴方は妻の爲めに泣いて下さいますの——娘は眠て居りますね——あ、起さないで置いて下さいまし。ロオルにフェリツクス——ね、ジャステインさん、あの子供達を御見棄てにならないで下さいましな。」

「然し奥さん、貴女が御死になるなんて云ふ事はありませんよ——決して死なぬと仰つて下さいまし——」

「シャルルはもう——間に合ひますまい——ジャステインさん、妻は貴方の御深切を心から御禮申し上げますよ——フェリツクを抱いて接吻してやれる事と思つて居ましたけれど——あの子は病氣ではないでせうね？——貴方さう仰つて下さいましたわね——でも妻あの子の爲めにもう一度御祈りをしませう——」

レオニイの聲は微になつた、間もなくそれも聴えなくなつた、——そしてジャステインの手の中でレオニイの手は次第に冷たくなつて行つた。若い勞働者は長いこと動かなかつた、彼はレオニイの掌を握つて接吻したり、涙で濡し

たりしてみたが、氷の様な掌を再び温くする由もなかつた、彼はレオニイの名を呼び續けた——やがて彼は絶望の色を顔に浮べ乍ら叫んだ。

「ああ、御なくなりになつたんだ——お氣の毒に——もうお會ひする事も出来んだ——彼は啜び泣き乍ら夜の明け渡るまで其處に蹲つてゐた。太陽が昇つて大分経つてから入口の戸が開いた。入つて来たのは放免されたシャルルであつた！ 彼は妻がまだ眠つてゐるものと思つて、ソツと音を立てない様に部屋の中へ入つた、そして床に跪いてゐるジャステインを眺め——妻を眺めた。彼には初めの中怖ろしい事實が信じられなかつた、が漸くに事實が呑み込めると絶望のどん底に陥ちて終つた、ジャステインはシャルルを慰めてやる爲めに、彼の悲嘆を押し隠さなくてはならなかつた。貴方はロオルさんの眼を醒まして御しまひですよ、——可哀さうなロオルさんは貴方の外に頼る人がもうないのですよ。」

レオニイが死んでから三週間経つた或る朝の事シャルルの住居の扉を劇しく叩く人があつた。彼は戸を開た、其處にはまだ若い、恐らく陽に焼けたためであらうが眞黒な顔をした紳士が立つてゐた、彼の苦味走つた顔には何處か優しい、人懐こい處があつた。この紳士は部屋へ入るなり云つた。

「此處がシャルル・ダルヴィイユ夫人の御住居かな？」

シャルルは吃驚して紳士を見詰め乍ら呟いた、

「ダルヴィイユ夫人——貴方はレオニイを——御尋ねなんですか？」

「さやう、勿論です——僕はレオニイを尋ねてゐます、妹のレオニイ、優しいレオニイ、もう久し、會はん妹を尋ねて居ります—」

「貴方の妹——では——貴方は——」

「アドリイン・フォルメルです——レオニイの兄です、レオニイが御話したことと思ひますが、貴方は妹の主人で居らっしゃいますか？」

「さやうです、——レオニイはよく貴方の御辱を致しました——レオニイは貴方の事を忘れませんでしたつけ——」
 「然し今何處に居りますか？——僕は早く妹に接吻してやらうと思ひますが——え——黙つて居られるのは、涙を御見せになるのは何うした事なんですか？」

「レオニイは——三週間前に——なくなりましたので——」

「ええつ！ 死にましたつて——ああ——可哀さうに——」

暫くの間誰も口を利かなかつた、重苦しい沈黙があつた、やがてアドリインは部屋の中を見廻した。

「レオニイが死んだのか——悲しみの爲め——貧乏のためか、多分さうだらう、僕はみんな知つて居る。僕はフランスへ歸つて來てから妹とその主人の事をいろ／＼聞き合せました、その良人の所業を悉く知りました、然しそんな事はもう何うでもよい——貴方は子供が御有りなさうですが。」

「息子を喪ひましたが、まだ女の子があります、六歳になります。とアドリインの前では眼を擧げる事の出來ぬシャルルが答へた。

ルルが答へた。

「何處に居りますか？」

ロオルは知らない人の前へ出るのを怖がつて部屋の隅に隠れてゐた、シャルルは彼女を抱いて來た、ロオルの叔父はロオルを抱いて、その顔を凝と眺め、優しく接吻した。

「僕はお前の叔父さんだよ——これからお前のお父さんだよ——これから御前の御父さんになるんだ——さうだ、お前は妹とそつくりだ——何うだね、叔父さんが好きかね？」

「ええ——好きだよ。」

「叔父さまと云ふんですよ。」

「では、叔父さま。」ロオルは優しい叔父さんに直ぐ懐いてしまつた。アドリイン叔父さんはもう一度優しく接吻してからロオルを下へ降ろし、シャルルに向つて急ぎ込み乍ら、打切な調子で云つた。

「メルヴィイユさん、僕は長い事外國へ行つてゐました、それも纏まつた金が欲しかつたからです、幸にして叔父の遺産を資本にして掛つた仕事が行つて、一ヶ月に五千フランの收入がある位の財産が出來ました。餘り大したものではありません、何うやら他人の助力を仰がなくても生活して行く位の事は出來やうと思ひます。貴方がこの數年間何一つ爲さなかつた事を僕は知つて居ります——可哀さうな妹のレオニイは屋根裏部屋で死んだのです——然し貴方は此處で娘さんを育てて行けると御考へですか？」

「それは——」

「或は僕の申條は甚だ打切極であつたかも知れませんが、然し僕は廻りくどいことを云へん性質です、要點だけを申しますが——貴方は現在何か職業を御持ちになつとられますか？」

「いえ、御坐いませんでして——」

「それでは此の子は何うなりますか？　この可愛い娘が母親同様不幸な生涯を送ると云ふ様な事は考へる丈けも憚らしい事です。僕は斯う考へます、この娘さんを僕に下さるのです——無條件で僕に下さるのですな——僕は今後結婚しないと云ふこと、娘さんが結婚する時には僕の財産の三分の二を持參金として贈與すると云ふことを約束させよう——僕は條件を一つ呈出します——それは貴方が娘さんを御訪ねにならんと云ふことです——遠慮のない處を申しませんが、僕は妹を不幸に陥れた貴方に逢ひ度くないのです、それに貴方と親類交際をする必要を認めないのです。」「何んと仰有るのですか、貴方は私の娘を奪つて終はうとなるのですか？——若し私が失つた財産の幾分なりを働いて恢復した場合には、快く娘を御返し下さるでせうか？」

「僕はその様な心算ではありませんよ、そののみならず僕は現在の状態から脱するだけの事はして上げる考へです——他日貴方が僕の處へ御見えになつて、立派に生活を立て、娘さんを教育し、立派に結婚させる事が出来ると云ふことを御證明になつたならば、直に娘さんを御戻し致しませう——晩までによく御考へ置き下さい、夜分御返事を承はりに参りますから。」

彼はロオルを抱き上げ、シャルルに軽く會禮して「晩まで」と繰返し乍ら忙がし氣に出て行つた。シャルルは惱ましさに考へ込んでゐた。午後になつてジャステインが歸つて來た、シャルルは彼にレオニイの兄が來訪した事、彼の申出などに就いて打ち明けた。ジャステインは悦んでロオルを抱き上げ、彼女に接吻した。

「ねえロオルちゃん——もうあなたには會へませんね、がこれからは幸ですよ——シャルルさん、御承諾なすつたのでせうね？」

「ロオルの叔父は今夜返事を聞きに來るさうです——ジャステインさん、ロオルは私に殘された一つ一つの物です——然しロオルの叔父は僕がロオルを養へるやうになつたらば直に返して呉れると云ふのです、僕は出来るだけ早く手取る決心ですが。」

ロオルは父親とジャステインの話に耳を傾けて居たが、なんの事か解らなかつた、父親はロオルに向つて云つた。

「ねえロオルや、御前は御父さんとさよならをして叔父さんの處へ行くんだよ——今朝來た小父さんさ。」

「あたし御父さまとさよならしないのよ！」とロオルは小さな腕をシャルルの首に廻し乍ら叫んだ。

「ロオルや、お前は幸福だよ、叔父さんは御前の好きなものを買つて下さるよ——立派な御家に住むんだ——大きな綺麗な御庭で遊べる事が出来るのだよ。」

「でもあたし御父さまとさよなら嫌よ。」とロオルは父親に身を寄せ乍ら云つた。

「ロオルちゃん、あなたは御母さまが大好きだつたでせう、若し生きて居らつしやればきつと叔父さまの處へいらつ

「しゃいと仰有いますよ——今でも御母さまはさう思つて居らつしゃいますよ。」とジャステインが云つた。

「あら、御母さまが御悦びになるの？」

「さうですよ。」

ロオルは黙り込んだ、母親を悦ばせる事と聞いて、子供心にもどつと悲しさを耐へて泣かなかつた。やがて夜になつた、レオニイの兄は約束通りにやつて来た。

「さて、御決心が附きましたか？」

「何ぞ御連れ下さい——何事も承知致しました。」

「さうですか——此處に財布があります——三千フラン入つてゐます、若し僕の忠告を御用のなになるならば、ニユウオクカバタヴィアへ行つて一旗御揚げになつたらよいでせう——さ、ロオルちゃん、お出で——行くのだよ」

「もうお連れになりますので？」

「愚圖くして居る必要はないと思ひますがね？馬車が待て居ますからな。其處で泣いてゐる青年は何方ですか？」

「私達が非常に世話になつた労働者です——レオニイの病中、費用一切を出して呉れたのです——妻が死んでから此方私達はあの人の世話になつて居ますので。」

アドリインはジャステインの傍へ行つて握手を求め、力を籠めて握手し作らぶつた。

「御親切に對して御禮の申し様もありません——ロオルに御ひになり度い節はアドリイン・フォルメル宅を御訪

ね下さい、——悦んで御目に掛りますから——さ、ロオルさん、行きませうね。」ロオルは父親に接吻し乍ら泣いた、

ロオルは父親と別れたくなかつた、ジャステインは彼女を抱き取つて叔父さんの手に渡し乍ら叫んだ。「御母さまの事を御考へなさいよ！」小さなロオルは泣きぢやくり乍らも隠しく抱かれて行つた。

次の日の朝早く、シャルルは外出し乍ら獨言の様に叫んだ、「悲しがるのは愚劣だ、何んにもならんぢやあないか——一つ鬪いて財産を作つてやらう——ハアダル行きの馬を買つて、其處からインドへ出發しよう。」

百ヤアドと行かないうちに、彼は誰かに腕を握られた、彼を引き止めたのは流行の帽子を被り、新しいフロツタコオトを着込んだモンジエランであつた。「やあ何うした？——僕は一週間ばかり君を捜して歩いたよ——僕は君が鼠の様な生活をしてゐるものと思つてゐたんだ。」

「モンジエラン君、あれからいろく悲しい事があつてね！レオニイが死んだのだ。」

「さうか、そりやあ力を落したらう——が僕の女房も死んだんだ、それで僕は元氣が良いんだがね！處で君は妻と氣が合つて居たんだから鬪つたらう——まあ君も出来るだけ愛してやつたんだし——いつも深切にしてやつたんだから悔む事は無いだらう——十年泣き續けたつて歸つて来はせんよ。處で僕の女房はなぜ二ヶ月程前に死んで呉れなかつたんだらうな、さうすりやああのフロオル・ティゲル嬢と結婚する事が出来たんだのに！フロオルは囃屋の女房になつてるとよ、いいさ、僕は又外に捜さあね！——有難い事に僕の女房は一千フランばかりの金を残して置いて呉れてね、——つまりこの金を處分する前に死んだんだ——従つて誰の手へも渡らなかつたんだがね——今ぢやあ天下暗

れての獨身者なんだ！」

「妻の兄が外國から歸つて来て娘を引取つて呉れたよ——相續人にするつもりだ。」

「それは良かったな——それで君も身輕だ。」

「その兄だがね、僕に三千フランの金を呉れて一旗あげると云ふのだ。」

「君が三千フラン貰つたつて？ 僕の處には一千フランある——おい君、僕等はフランス第一の果報者だよ！」

「僕はこの金を資本にしてウソと儲けて、娘を取り戻す決心なんだ——パリイを立つてインドへ行くつもりさ。」

「なんだ下らん！ が兎に角旅行しようぢやあないか、だが何うしてインドへなんぞ行くんだ！ 一つイングランドへ、ロンドンへ行かう、僕は女を蕩し込んでやる、百万フランの金がある女だつたら、君に半分やるよ、ナイヤガラへ投身する必要なんぞあないさ。」

「然しロンドンで——何をやるんだい？」

「まづロンドンへ行つて、其處から君の行き度い處へ行く事にしよう——さあ、シャルル君、僕は善良だよ、君も機變らず善良な男だらう——カレエまでの切符を買はうぢやあないか？」モンジエランはシャルルと腕を組んだ。次ぎの街で二人は一人の青年と擦れ違つた——青年は二人の姿を見て立ち止まつた、シャルルは眼を俯せて足を早めた。この青年はジャステインであつた、彼はシャルルがモンジエランと腕を組んで居るのを見て、驚きの餘り口も利けないで、釘付けにされた様に其場に立ちすくんでゐた。

二二三 八年後

九月の晴れた日の事、二人の汚い服装の旅人が今しもクリシイの關門からパリイへ入らうとして居た、一人は蒼白い顔をした、慥れ切つた男で、斷へず悲し氣に頭を垂れて地面を見詰め乍ら歩いてゐた、もう一人の方は同様に汚い服装はしてゐたが、昂然と頭を擧げ、帽子を阿彌陀に被り、擡り太の杖を持つてゐた。頭を垂れた男は關門近くで急に立ち止まつて叫んだ。

「こんな態で僕はパリイへは歸り度くないよ——而も晝間中ぢやあないか——知つてる者にでも會つたら何うしよう——モンジエラン君！——八年前のわれ／＼の立派な計畫がこんな結果になつたんだ！」

「シャルル君、君は又泣言を言ふのかい！ 莫迦／＼しいぢやあないか。成程われ／＼は成功しなかつた——が僕が悪いからぢやあないよ！——イングランドで僕は二十人近くの女と結婚しやうとしたんだ——奴等が肝心の所へ行つて氣を變へやがるのが僕には何うしても辨らんがね。ゲルマニイぢやあ上首尾さ、然し彼奴等は何て喧嘩好きなんだらう、僕は次ぎから次ぎへと決闘ばかりしなけりやあならなかつたつけ——僕は平和な人間なんだがなあ。旅行は實に人間の品性を陶冶するもんだね、非常に僕等は得る處があつたよ。——何うだ、一つ旅行記を書かうか、青年の修養になるよ。」

「娘のロオル——可哀さうなロオル——僕はもう八年も會はないんだ——」

「なあにあの子の爲めにやあ却つて幸福さ——何うすると言ふんだい？——さ早く行かうぢやあないか——」

シャルルは答へなかつた。彼は新しい並樹路を、**ト、ト**と歩いて行つた。モンジエランは彼から少し離れて歩き乍ら獨りで喋つてゐた。「なあに、さう悲觀する事はないさ——第一に僕はまだ七フラン持つてゐるんだ——君はヴァイオリンの腕を持つてゐるんだ——外國で非常に役に立つたぢやあないか——それに僕の最後に征服した女が呉れた嗅ぎ煙草入れがあらあな——その外に二挺のピストルだ、こいつは結婚式の樂隊をやつてやつた時に軍人上りの男が呉れたものさ。まづこの煙草入れとピストルを賣り飛ばして君のヴァイオリンを買ふんだ——僕は一ヶ月會費六フランで慈善舞會をやるよ、これが當りやあ大儲けさ——おい、シャルル君、何うだ？ 豊になつたんだと指揮者になれんよ——」**ペ、ペ、ペ、**ラシエエズ共同墓地の入口の前に立ち止まつて、シャルルは暫く思ひに沈んでゐた。

「何をして居るんだね？」

「此處に眠つてゐる妻と子供の事を考へてゐるんだ——寄つて行かうと思ふ。」

「何んになるんだ——然し行き度かつたら行つてやるさ——僕は向ふの酒屋へ行つた方がいいな——そりやあ君が行くのは自由さ。」

モンジエランは行つてしまつた。シャルルは重い氣持になつて、眼に涙を浮かべ乍ら靜かに墓地に入つた。彼は頭を垂れて墓の間を縫つて奥の方へ進んで行つた。やがて彼は日光を透さぬ程に茂つた生垣に圍まれ、前に被垂れ柳を植

え込んだ墓の前へ出た。彼は地に跪いて墓を取置んだ隅に頭を伏せた。——暫くして彼は我に返つた。何んともいふことの出来ぬ平和が彼の心に甦つたのであつた。シャルルは四周を見廻し、其處に安らかに眠つてゐる者の名を知らうとして石の表面に刻まれた名を讀んだ。「此處にレオニイとその愛兒フェリツクス眠る。」

「レオニイ——フェリツクス——」と彼は地に倒れて叫んだ。「妻——フェリツクス——ああ、それだから私の氣持が平和になつたのだ——しかしこの墓——花束——新しい花束——何うしたのだらう？ 誰が私の代りの墓を立て、呉れたのだらう？」

樹立の中でさや／＼と葉落れの音がした。彼は眼を擧げた。一人の男が墓の方へ歩いて來るのであつた——シャルルはその男を見て思はず叫んだ。

「ジャステインさんですな——此處に妻のレオニイとフェリツクスが眠つて居るのですな？」

「さうですよ、」とジャステインは答へた。彼はシャルルのみすばらしい様子に驚いたらしかつた。「さうですよ、毎週私が來て、香花を手向けてあげて居りますよ——さあ中へ御入りなさい——さぞ御二人とも扱はれる事でせう。」彼は門を開けた。其處には一面にレオニイの好きだつた草花が植えられてゐた。シャルルは墓石に幾度も挨拶しながら歸返した。「私の妻——私の息子——」彼は長いこと冷たい墓石に額を押し當ててゐた。涙は止め度なく彼の頬を傳はつた。ジャステインは彼が悲嘆に堪へられぬ程慟し切つてゐるのに氣が付いて、彼を助け起して墓畔を離れた。暫くしてから氣を取り直したシャルルが云つた。

「僕は今パリイへ着いたので——八年ばかり外國を放浪しました——あの——ロオルは何うして居りませうか、生きて——」

「生きて居らつしやいますよ、御母さんその儘の美しい嬢さんに御なりです。私はつい先頃御目に掛りましたよ。叔父さんと御一緒です、叔父さんは大事にして下さるし、ちゃんとした教育を施して下さるやうですよ。」

「ロオルが無事ですつて——ああ、有難い——が、あの子は僕にとつてはもう死んだも同様です——貴方は御存知ですが——私は曾ては——こんな惨めな態で歸國したんです——が僕は嬢に會へさへすれば満足です、會へさへすれば——」

「嬢さんの幸福を御嘆きになる事はありません、ロオルさんの幸福の邪魔をなさるのではありませんね——」

「ええ 貴方の仰有ることは良く判りましたよ、ジャステインさん！ 貴方は——こんな惨めな父親の姿を見たら——」

「あのロオルが何んなに辛からうと考へてゐらつしやるんですね——それは無理ありません。」

「私は決してそんな事を申したではありませんよ、が暫く御辛抱が出来ますかしら？」

「ロオルは今でもビエルフィットに居りますか？」

「さうです。」

「ジャステインさん、失禮します——」シャルルはそのまま墓地から走り出た。

「何うしたんだい？」とシャルルが墓地から駆け出した時、丁度酒屋から出て来たモンジエランが叫んだ。「おい、返

事をした——死人と交際ふと生きた人間に交際へなくなるものかね？ まるで何かに追つ掛けられてゐる様に走るぢやあないか？——パリトへ歸らないで、郊外へ飛び出すのかね？」

「幾時だらう？」シャルルはモンジエランに訊ねた。

「今は——もう正午かな。」

「ああ——間に合ふな——晩までには行けるぞ——」

「何處へ行くんだ？」

「ビエルフィットへ。」

「何に行くんだ？」

「嬢に會ひに行くのだ。」

「嬢に——ではさう急ぐことは無からうぢやあないか——まづ緩り休んでからにしようよ。——その方がいいよ——」

「彼はシャルルの腕を執つて彼を引留やうとした、シャルルは彼の手を振り放し乍ら、腹立たし氣に叫んだ。『放せ——』

「放して呉れ——僕は餘り君の云ふなりになつたんだ——僕を追つ掛けないで呉れ——もう二度と會ふまい——」

モンジエランは彼の離幕に驚いて、駈つたまま手を放した、シャルルは振り返りもせず足早に、彼を支那したのは嬢のロオルに會ひたい一念であつた、墓地——ジャステイン——妻子の墓——は彼に過去の記憶を喚び起させた、彼は自ら咒つたりして、罵つたりした。やがて彼はサンドニの街道へ出た、そして道を尋ね尋ねビエルフィットへ歸

つて歩いて行つた、彼は時々倒れさうになつた、そんな時には欄に寄り掛つて息をついた、やがて村の端づれの家が
見えた、彼は疲勞を忘れて獨言つた。

「俺の娘が居るのだ！」彼は歩みを緩めて村へ入つた、そしてあたりを見廻してアドリンの家を訊ねる人を捜した。
彼は一人の百姓女に向つて訊ねた。

「フォルメルさんの御宅は何處でせうか？」

「フォルメルさん——あの綺麗な御殿さんのある且那ですね——この通りを直ぐに行つて、最後の道を左に折れ
て、突き當ると——緑色の窓のある家がありますよ——それがフォルメルさんですよ。」

彼は教はつた通り歩いて行つた、突然彼は立ち止まつた、フォルメル氏の家が彼の眼に映つたのであつた。彼は脚が
一瞬になつた、「あれだな——あれに違ひない——これが俺だな——大きな立派な家だらう——ロオルの部屋の間
が判つたら——庭を歩いてゐるかも知れんな——さうだ此處に居やう——雨が降つたら、あの間の下だ——娘が外へ
出るまで此處に居やう——」彼は時々窓の方を振り返り、廊下に沿つて歩いた、彼はもう少しも疲勞を感じなかつた、
廊下の隙から中を覗いたり、耳をそばだてたりしながら、フ、フ、と歩いて行つた、そして一寸物音がしても驚えなかつた。

そのうちに彼は小さな門へ行つた、扉は半開いてゐた、彼はソツとそれを押して中を覗き込んだ。近くに誰いてゐ
た庭師が一寸彼を眺めたが、そのまま仕事を續けて行つた。シャルルは大きな、立派に手入れの届いた庭園を見渡し
た、此處で娘が八年の間、静の間の草の茂みの庭で遊んだのだと思ふと彼は何とも云ふことの出来ぬ氣持になつた、彼

は壁に凭れたまま身動きもしなかつた。見知らぬ男が黙つたまま、何時まで経つても動かないのを覺に思つた庭師は
時々彼の方を眺めた、がシャルルは家を眺め、仔細りて繰返してゐた。

「きつと出て来る——出て来る——」

「おい、何うしたんだい、御前さんはこの庭が大分氣に入つたやうだな？」と庭師がシャルルに云つた。

「ええ、さうですよ——何うも長いこと御邪魔をすまませんな——然し——」

「なあに——構はんさ、俺の仕事の邪魔になるぢやなし——」

「何方の御庭ですかい？」

「フォルメルさんだよ——善い方だな、然し少々氣六ヶ敷家やいらして、庭御さんの様に人好きは良くないがね——
ああ！ 庭御さんてえのは善い方で、親切な、美しい方だな——御前さんの様な人を御見掛になつたら、きつと何か
下さるよ——」

「さうですか——是非御目に掛りたいもんだが——」

「なにそいつなら造作もねえよ——今窓から外を見て御坐らつしやる。」

305
彼が言ひ終らぬうちにシャルルは窓の方を眺めた——彼は娘の姿を見た、庭師に返事も仕ないで其處から離れた。
直ぐ窓の下の小路を傳つて行けば、庭の近くへ行けるのに氣が付いた、彼は壁に沿つて走つて行つた、が近づくに従
つて彼は幸祿を少しでも長く味はうとする様に、夢を見て居るのではないかと疑ふ様に歩みを緩めた。彼は窓の下へ

近附いた、ロオルは遠い田園の風光に眺め入つてゐて、彼女の近くへやつて来た男に気が付かなかつた。彼は貧る様にロオルを眺めた、彼は十四になる娘の中に彼女の母親の淑かな舉動、單純な美しさ、レオニイ生寫しの姿を見たのであつた。

ロオルはふと下を眺めた、彼女は窓の下の小路に立つてゐる男に気が付いた、彼の視線は釘付けにした様に彼女に注がれてゐた。少女は最初は薄氣味悪く思つたが、直ぐにそれは憐れみに變つてしまつた。ロオルはその男が涙ぐんで居る様に思つた、よく見るとその男は手を合せて、それを彼女の方へ差し出してゐた。彼女は氣の毒な男が憐れみを求めて居るのだと云ふ事を知つた。

「御待ちなさい——御待ちなさいよ——」と彼女は叫んで窓の中へ姿を隠した。

「ああ、去つてしまつた——」シャルは獨言つた。「が待つて居ると言つたつて——何うする心算なんだらう？——もう一度會へるかしら——可哀さうに——俺を見て氣の毒に思つたらしいが——氣が附かなかつたのだ——」彼は窓を見詰めてゐた。ロオルは直ぐに姿を現はした、彼女は大きな麵麵の塊と十スウの銀貨を手につけて居た。ロオルはそれを父親に向つて投げた、

「もつとあげたいんですけれど——」

シャルは娘から施し物を受けて胸が潰れた様に感じた、が彼は麵麵と銀貨を拾ひ上げ、銀貨を唇に押し當度も接吻し、涙で潤し乍ら叫んだ。「有難う——有難う——御嬢さん——」

「まあ、何うしてそんなに泣くんですの？」とロオルはいたく心を動かされて云つた。「いつも不幸な事はありませんよ——御氣の毒ね——さよなら——あたし貴方の爲めに御祈りをして上げますわ——」ロオルは窓を離れて、ガラス戸を叩め、父親は其處に立つたまま娘の姿の在つた場所を凝と見詰めてゐて、半時間程経つても其處から動かなかつた、彼は魂を垂れ、暗い眼附をし乍ら地面を見詰めてゐた。彼は漸くの事で其處から去つた、何處と云ふ當もなく村を出て行く並路を、とほ／＼歩いて行くと急に彼は呼び止められた、モンジェランは樹に寄り掛つてシャルルの遺つて來るのを見て笑つた。

「やあ——君は此處で僕に會はうとは思はなかつたらう？　なあに氣に仕給ふな——僕は君を尾行して來たんだ！　何うも仕てはならんと云はれると仕たくなるんでね。」

「君は何うしても僕を自由にして呉れんのか？」とシャルルは叫んだ、「僕は餘り君と深入りをし過ぎたのだ——」

「僕は君と離れまいと決心してゐるんだ。」

「もう君と一語になるのは御免だ——僕は益、ドン底へ陥ちて行くばかりだ——僕の不幸の原因はいつも君だ——僕に莫迦な事をさせたのは君なんだ——」

「成る程ね、君の云ふ通りさ、君が愉快や女遊びが好きになつたのは僕のせいかも知れんね——」

「相手が君でなかつたら、僕は妻の云ふ通りになつて——妻を死なせる様な事も仕出かさなかつたらう——」

「おい、君は承知で僕を怒らせようとしてゐるのか？」

「君は僕が今何んな目に逢つたか知つちやあ居まい——娘が僕にこのペンを投げて呉れたのだ——僕を乞食だと思つたんだ——が僕には名乗れなかつた——もうこれから先きも娘を抱いて、自分の娘だと呼ぶ事は出来ないだらう！——さう考へると僕は堪らない——これが最後の御馳ひだ、僕を自由にして呉れ給へ——僕は此方へ行くから、君は向うへ行つて呉れ給へ、そしてもう二度と顔を合せ度くない！」

「シャルル君、君だから我慢もするが、外の奴だつたら容赦せん入！」斯う云ひ乍らモンジエランは彼の前へ立ち寄り、シャルルは彼を突き除けて歩いて行つた。

「侮辱だ！ 若し俺が貴公を憐んで居なかつたら——！」

「憐む！」シャルルはいきなり向き直つてつかくとモンジエランの肩へ進み寄り彼を睨み附けた。「貴様が俺を憐む？、この悪黨め——それだけ聞きやあ澤山だ——氣を附けるがいい——俺は妻と子供の復讐を謝罪しといてやる——」「シャルル君、僕を怒らせん方がよからうぜ！」

「君はピストルを持つてゐるな？——君の侮辱が償へるものか何うか定めようぢやあないか——ピストルを一挺遣し給へ——」

「シャルル君——行き給へ——もう君を阻止めようとはせん——行き給へ——君の彼を助けやせんから——」

「何んだつて！ 卑怯者め！ 貴様のやる事は片づいから爾方だ！」

「卑怯者たど！」モンジエランは眼を光らせ乍ら叫んだ。「貴公は決闘を迫るのか！ シャルル君——よし、君の望み

に任せて決闘しようぢやあないか！」彼はポケットを捜つてピストルを二挺取り出し、装弾してあるのを確かめてから一挺をシャルルに渡した。「十歩退つて射撃し給へ！」

「最初は君だ！」とシャルルは五六歩退つて答へた。

「ふん！ では同時に射撃して片を付けようぢやないか！」シャルルは點頭いた。二人は狙ひを定めるが早いか、同時に火蓋を切つた。モンジエランの耳朶をかすめて弾丸は唸り去つた、シャルルは心臓を撃たれてハッターリ仆れた。モンジエランは駆け寄つて彼を助け起さうとした、がシャルルの即死した事を知つて、二挺のピストルをポケットに納めながら其處を離れた。彼は立ち去るに當つて大聲で叫んだ。

「實に可哀さうな事をしたわい——人の善い男だつたがなあ！」

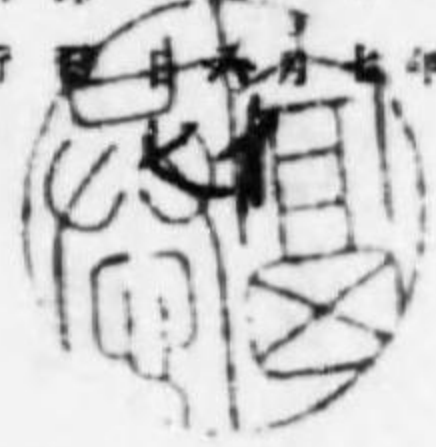
(終)

發行所
東京小石川
表町一〇九
會社
ア
ルス

電話
振替
東京小石川
二四八八
三五七〇
番番

有 所 權 限

大正三十七年七月五日
大正三十七年七月五日



著者木村信次

合資會社アルス代
發行所北原鐵雄
東京小石川區表町九番地

印刷所山本源太郎
東京小石川區久堅町四十五番地

惡友

定價 壹圓貳拾錢

ーリラアイラ・ーアラユビホ・スルア

既刊

- | | | |
|---|------------------|------|
| 1 | 深紅の腕 (アワースラー) | 火野 錫 |
| 2 | メイ・フラワア號 (イバニエス) | 村上啓夫 |
| 3 | 生ける屍 (フロースト) | 牧 繁一 |
| 4 | 青衣の乙女 (ル・クウ) | 藤岡良三 |
| 5 | 悪友 (テコツク) | 木村信次 |
| 6 | 軍人禮讚 (シヨオ) | 坪内逍遙 |
| 7 | 大なる飢え (ホーエル) | 内山賢次 |

各冊定價圓貳拾錢・各冊送料貳圓

ーリラアイラ・ーアラユビホ・スルア

續刊

- | | |
|----------------|------|
| 恐怖の映畫 (フレテリツク) | 瀧村 積 |
| 青夫 人 (フールジユ) | 五味 拓 |
| 歌妓の秘密 (オルネ) | 福永 煥 |
| 彼女 女 (ハツガード) | 三好十郎 |
| 百姓小屋 (イバニエス) | 木蘇 毅 |
| 天才の悲劇 (バルザツク) | 藤井 峻 |

各冊定價圓貳拾錢・各冊送料貳圓

アルス英文叢書

本叢書は近代文學の寶玉たる泰西の名著に我邦語學界の權威文壇の諸大家が詳密なる註釋及び譯文を附せる物にして正に日本文藝界の驚異語界の最高權威也。

1. ギード・モウバツサン作 橄欖の森 定價壹圓貳拾錢
馬場孤蝶氏詳註 書留送料拾參錢
2. トーマス・ハアダイ作 歸らぬ舟 定價壹圓貳拾錢
平田禿木氏譯註 書留送料拾參錢
3. ショセフコンラッド作 春 青 定價壹圓貳拾錢
平田禿木氏譯註 書留送料拾參錢
4. シモンズ其他作 近英小品集 定價壹圓貳拾錢
平田禿木氏譯註 代國 書留送料拾參錢
5. ショウジ・ギツシンク作 田園の春 定價壹圓貳拾錢
戸川秋骨氏詳註 書留送料拾參錢
6. ロセツテイ女史其他作 近代英詩選 定價壹圓貳拾錢
平田禿木氏譯註 書留送料拾參錢
7. イワン・ツルゲーネフ作 獵人日記 定價壹圓貳拾錢
戸川秋骨氏譯註 書留送料拾參錢
8. オスカア・ワイルド作 新生上卷 定價壹圓貳拾錢
平田禿木氏譯註 書留送料拾參錢
9. ラフカザオ・ヘルン作 怪談 定價壹圓貳拾錢
戸川秋骨氏譯註 書留送料拾參錢
10. オスカア・ワイルド作 新生下卷 定價壹圓貳拾錢
平田禿木氏譯註 書留送料拾參錢
11. フランボオ作 鋸山奇談 定價壹圓貳拾錢
戸川秋骨氏譯註 書留送料拾參錢
12. ステヴンソン作 幻の人 定價壹圓貳拾錢
戸川秋骨氏譯註 書留送料拾參錢

ーリラアイラ・ーアラユビホ・スルア

黒い チユリツプ (チユウマ)	近代人の告白 (ド・ミュッセ)	リリアン (メンネット)	センキウツチ 短篇集	ヴァセツク (ベックフォート)	赤い百合 (フランス)	南方の情熱 (ドオデ)
藤岡良三	伏見茂雄	藤井峻	村上哲夫	長尾豊	浅田清造	鶴飼馨

錢貳拾料送册各・錢拾貳圓壹個定册各

英文學印象記

—平田禿木氏著—

本邦英文學の最高權威

平田先生最近十年研究の結晶

卷頭まづ最近英文壇の消息をつくし、「現代英文學概観」は九十年代の盛時より説き起し刻下の英文壇を詳述し、昨年ノベル賞を贏ち得たる、イエーツを中心とする新ケルト文學、バアデイ翁を頭目とする英新詩壇の委曲を叙せるものにして、精緻を極むる詩人キーツの研究と共に本卷の二大雄篇をなすもの也。其他チエスタントの劇星シヨオの評及チエスタントの名著「ヴィクトリア朝文學」を紹介せるものの外、十八世紀に於ける英文小説發達の跡を述ベテフオオ、スキフトの二大作家の風貌を傳へ、瀟灑珠の如き著者最近の隨筆感想悉く英文學の精髓を收めて遺憾なし。世界文學の源泉たる近代英文學を知らんとする人英語及英文學に志す人人必讀の名著として擴く本書を薦む。

—四六判箱入・定價貳圓五拾錢・送料拾五錢—

**A
R
S**

527
8

終